

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue	Cyan	Green	Yellow	Red	Magenta	White	3/Color	Black
1	2	3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16	17	18

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A	1	2	3	4	5	6	M	8	9	10	11	12	13	14	15	B	17	18	19
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20

特1
2493

林書八册全

林政八書
全

特1
2493

31. 6. 22

林政八書序 未幾其害益甚
山林之於國家。其關係固大矣。可以足
材用。可以防水旱。山林之法制不可不
修也。斧斤無時入。擅剪放伐。則竟致山
相濯々而已。於是材用之缺乏立告。水
旱之災害交臻。而生民之不幸莫甚焉。
嗚呼。山林之於國家。其關係豈不亦大
乎哉。我縣有山林之制也。蓋始於具志
頭親方蔡文若。文若富經濟之才。夙察



林政之不可忽。自著山林真秘。後及爲法司也。首立制置司。計保護之方。畫蕃殖之道。法精而網密。林政大張。卽如柚山法式帳。山奉行所規模帳。柚山法式仕次之類。此皆係于其創意。後世常襲用其法。無敢改焉。而來殆二百年。山林鬱茂。得材用不缺。而免水旱之災害者。實文若力也。然而嚮有廢藩置縣之舉也。百事更始。未遑修其法。奸猾小民窺

間。擅剪放伐。無所不至。山相濯々之漸。已見。前縣令上杉氏深憂之。欲再興舊法而矯其弊。稟事朝廷。且請其資費。不得命而已。及岩村氏續爲縣令也。察事之終不可已。申請之。西村縣令及續於其職。竟得其允可。於是乃斟酌舊法。更立制置司。山林之政復張矣。今於舊記。摘拔樞要書凡八部。輯爲一書。名曰林政八書。上之梓。以頒當局者。當局者。夫

由是而計畫蕃殖之道保護之方。則山林之鬱茂材用之不缺。可得而期矣。是爲序。

明治十八年乙酉十二月上浣

沖繩縣大書記官從六位森長義撰

林政八書序
國ヲ有ツノ要ハ唯其數ヲ制スルニ在ルノミ何
ヲカ數ヲ制スト謂フ盛衰興廢ノ循環シ來ル是
レ數ノ免レサル所ナリ其衰廢ニ先立テ能ク之
ヲ挽回シ以テ遂ニ衰廢ニ歸セシメサル之ヲ數
ヲ制スト謂フ焉謹テ本縣中古ノ政ヲ觀ルニ寶
永以降元文ノ間ニ於テ明君賢相交相興リ制度
文物ノ見ルヘキモノ甚々多シ中ニ就テ此森林
法ノ如キ尤モ著ルシキモノナリ世々ノ當路者
若シ時弊ヲ酌量シテ至當ノ改良修正ヲ加ヘ以
テ實用ニ供シタランニハ其法ノ善良ナル或ハ

佛國ノ森林法ニ讓ラサリシヲ如何セシ文運振
ハス人才漸ク委靡シ關雎麟趾ノ意ヲ窺知ル者
地ヲ拂フニ至レリ何ソ以テ周官ノ法度ヲ行フ
ヲ得可ケンヤ粲然タル制度文物ハ徒善徒法ト
ナリ只一ノ文具トハ成リニキ是レ則チ數ノ免
レサル所能ク之ヲ制スルニアラサレハ以テ國
ト爲スヲ得サル言ヲ埃タサルナリ於是乎藩ヲ
廢シ縣ヲ置キ首トシテ數ヲ制スルノ方針ヲ定
メ續々擧テ之ヲ擴張シ既ニ其面目ヲ一新セシ
モノ尠シトセス而シテ林政ノ頽廢最モ甚シキニ
居ル故ニ縣令上杉君大ニ之ヲ憂ヘ以テ明治十

五年十一月之カ取締及蕃殖保護ニ要スル資費
ヲ朝廷ニ請ハレタレ命ヲ得サリシ尋テ會計
検査院長岩村君本縣ノ令ヲ兼子森長義君大書
記官タリ二君亦森林ノ禿相ヲ視テ深ク其放棄
スヘカラサルヲ察シ更ニ舊規ト現況トノ正鵠
ナル調査ヲ遂ケ別ニ施行ノ方法ヲ案シ以テ之
ヲ朝廷ニ稟ス内務大書記官西村君當縣令ヲ兼
ヌルニ及テ其允可ヲ得タリ是ニ於テ大ニ舊法
編纂ノ業ヲ興ス昇官及八等屬仲吉朝愛太田祥
介十等屬黒川作助仲嶺眞愛等其編纂ニ從フ則
チ舊法ノ當時ニ適セサル者ヲ擧テ審議討論其

行ハレサルモノニ附スルニ圈點ヲ以テシ竟ニ
以テ一書ト成シ縣令ニ呈ス縣令之ヲ名ケテ林
政八書ト曰フ今之ヲ梓ニ上シテ當局者ニ頒布
セラル當局者夫レ是書ヲ服膺シ又時弊ヲ看破
シテ之ヲ矯メ以テ森林蕃殖ノ道保護ノ方ヲ計
畫シテ敢テ怠ラスンハ則チ能ク其數ヲ制シテ
而シテ數ニ制セラレサル者ト謂フ可キナリ

明治十八年十二月上浣 沖繩縣勸業課長心得五等属石澤兵吾識

凡例

一此書柚山法式帳山奉行所規模帳柚山法式仕
次樹木播植方法柚山惣計條々山奉行所規模
仕次帳山奉行所公事帳御差圖扣の八種を蒐
め名て林政八書と云ふ
一書中柚山法式帳山奉行所規模帳は元文二年
の柚山法式仕次樹木播植方法は延享四年の
柚山惣計條々は寛延元年の山奉行所規模仕
次帳山奉行所公事帳は寶曆元年の御差圖扣
は明治二年の於て成れり
一此書意義簡明平易よして深切著明其山林家

よ裨益ある蓋淺鮮あらずを而して傳本甚稀あり因て印刷して山林よ從事せるものよ嘉惠と

- 一 此書原謄寫よ係る故よ間々遺漏あるよ似たり今唯誤字脱字を訂正して敢て其欲たるを補はざるものは先輩の勞を重とれはあり
- 一 書中仮名遣等正格を得ざるもの少いとせと
- 「れ」は「り」「き」は「ち」の類要とるよ是白壁の微瑕たるのよ故よ概して其舊よ仍る看者ふれを諒せよ
- 一 規模帳(第二項)山奉行差圖を受けとあるは役

所長の差圖を受けへきものとと

- 一 全上(第五項)附書の所爲は刑法よ據て處分とへきものとと以下之れふ準と
- 一 全上(第六項)附書の所爲亦同と
- 一 全上(第二十二項)唐船大楷木等の入用は現時之れあくと雖とも無類の良材と認るときは春秋二季山林係官巡視の際帳記とへきものとと
- 一 全上(第二十五項)附書の科鞭は一鞭金貳錢の割を以て科松料よ換へ金貳拾錢(拾貫文)を申付るものとと

一 杣山法式仕次第十七項村近方之山野内より
 不足分之敷地相考云々右等山野開墾せんと
 せるときは豫て出願許可を得て着手せしむ
 ものどとせ

一 規模仕次帳(第一二項)の科鞭は一鞭金貳錢の
 割を以て總て過錢に換るものとせ

一 全上(第十二項)取揚木又は代錢共所轄役所
 於て管理せしむるものとせ

一 公事帳中載る所(第一項附書)山奉行筆者の勤
 役年限は敢て現今行はるゝよらふとせ

一 全上第三項奉行筆者請所の如き奉行の職務

は各役所長を以て攝行せしめ筆者は舊に復
 せると雖とも詰所は必しも舊の如くからせ
 故に現今杣山支配は役所々轄區域に隨ふ

一 全上(第四項)日用錢の如き各地一定の率あり
 とも仕立の廣狹に因り時々増減あり

一 全上(第八項)中山奉行引付を以て普請奉行所
 へ納方云々は現今右等の如とあるよらふとせ

一 全上(第十一項)中百浦添とは舊藩主居城の如
 きを云ふ故に本項現今は無要に属せ

一 全上第十二項中唐船とは舊藩中清國へ往復
 せし接貢進貢の貳船を云ふ故に現今は此等

の事あり

一全上(第十四項)中御普請大御材木云々此等は
舊藩中諸公衙の建築材を云ふ以下一々枚舉
ふ違はらむ宜類推せしむ

一全上(第十六項より第二十項)中山奉行の職務
は總て役所長をして攝行せしむ

一全上(第二十二項)翌年中上納分津口へ取出置
云々此等も現今あるふはらむ以下上納或は
納方とあるは皆同し

一全上(第二十五項)中手形とあるは舊藩中材木
入用の都度手形を以て上納方を命せしむを云

ふ此等も現今絶てなし

一全上(第二十七項)山當山師山工人毎月朔日山
奉行筆者詰處へ罷出云々右は今後筆者詰處
へ罷出可然且星帳は恰も勤惰調簿にして星
の多少に因り役職進退に遅速あり現今は之
を襲用せず

一全上(第廿八項)附書御物奉行御取次云々今後
は役所に於て取調本廳へ具申すし

一全上第三十二項中唐船御船手早船渡地船爬
龍船等は現今之れなし且但書に御船手奉行
へ問合云々右等は今後役所より於て取扱し

一全上(第三十三項より三十七項)中造船に付ては別段達のあるを以て之と抵觸せることなかるへい

一全上(第三十九項乃至四十項)明松納方及び知行の如きは現今之れなく

一全上(第四十四項)漂着人等の爲め別小仮屋を設る杯のことは之なきを以て現今は無要小属す

一全上(第四十七項)の附書は現今無要小属す

一全上(第五十項及び五十一項)既小地頭の名稱あり随て遣夫木竹入要せるあり故小本項は

廢滅小属を

一全上(第五十七項)在番勤番船改奉行等の職名は現今之れあり故小送状宛名の如きは筆者或は番所藏元とあるへい

一全上(第五十九項)舊藩中は桐實を壓搾し油を製せしも現今は此事あり好し之れありとするも帳當座及び錢藏の如き廢滅小属するを以て時小臨て處置するふとあるへい

一全上(第六十項)舊藩中は木材入用小際し臨時小切出を命する等のふとありしを以て本項の必要ありしからん現今は公用の爲め臨時

切出しを命する杯のみとは之れかきを以て
無要ふ属す

一全上(第六十一項)唐船は前ふも述たる如く現
今之かきを以て楷木の要あり

一全上(第六十二項)山奉行檢者俱ふ現今は廢滅
ふ属するを以て筆者若くは地頭代惣山當ふ
於て取締をかすへ

一御差圖扣(第十項)科松料錢五千貫文或は壹萬
貫文とあるは當時銅錢と鉄錢との歩合ふ變
更ありしを以て斯く其額增多せしも現今は
然らざるふ依り従前の千貫文或は貳千貫文

を科すへ

一全上第十一項良材帳記の件は毎年春秋二季
山林係巡視の際執行すへ

一此八書中實施難致分は總て圈點を付す



柚山法式帳

柚山見様之事

第一項

一山之急立候傍は峯地と申亦

平立候傍は嶺地と申候

嶺地峯地句倍次第

上中下有之候其

見様圖よ記

之



山法式帳

第二項

一左右高山にて其間底地之平に有之候所は澗地と申候亦嶺地之前に向居候高山は對峙と申候嶺地之後に有之候高山は祖山と申候左右山之高く同様よして相向候は相對峙と申候亦山氣之不洩様諸山之相圍候を抱護と申候亦抱護左右之手先よて衣裳之領を打合候様に入違候所を抱護之閉と申候事

第三項

一嶺地依場所上中下有之候抱護無不足對峙高卑遠近之列合丈夫有之候所は上敷にて候對

峙高く候とも抱護一方相欠候か亦是對峙抱護相揃候とも餘り遠相離れ氣之詰様不宜所は中敷よて候對峙卑抱護一二ヶ所相欠氣之洩候所は下敷よて候事

第四項

一峯地も上中下有之候抱護高寄詰候所は上敷よて候右通寄詰候ても抱護之欠所有之候は中敷よて候抱護欠所無之候とも遠相離れ氣之詰様不宜所は下敷よて候事

第五項

一澗地に上中下有之候澗地之場所廣有之候所

は上敷よて候左右嶺地之間に有之候澗地ハ
中敷よて候左右峯地高立候間に有之候澗地
は下敷よて候事

第六項

一山敷之儀嶺地は陰陽和生之地よて一番敷地
に候峯地は純陽不生之地よて二番之敷地に
候澗地は純陰不生之地よて三番之敷地に候
事

附平地廣大之所は嶺地之差次よて諸木能
生立申事に候得とも右之地方は田畠仕用
に從往古山敷被召除置候

第七項

一嶺地之場所如何よも廣く有之候所を專一に
可見立候大船之櫓木は嶺地上位之内如何よ
も廣有之候場所より可致出來候其心得を以
杉杯差付能致盛生候様に入念候儀肝要候事

第八項

一嶺地廣有之候所は假令抱護對峙無之候とも
樹木相應生立申候亦兩方卑き嶺地之裔に相
續候所は澗地迄も相應に生立候事

第九項

一對峙高抱護相勝候嶺地は其項迄諸木能盛生

仕候然とも嶺地之裔對峙近く寄詰澗地に似掛り候所は樹木勝不申候嶺地對峙之間依遠近善惡有之事候亦對峙卑く嶺地高有之候所は對峙之項より相下り候所は諸木相應に生立上之方は立兼申事候抱護之卑も同斷候事

第十項

一峯地之内に少々嶺地相交候所も有之亦嶺地之内に峯地相交候所も有之候其見分け可有之事

第十一項

一嶺地對峙之間に卑き岳有之候は、夫とも嶺

地同前に諸木能生立候左右之峯地高立候間に卑き岳有之候者澗地同斷よて然々之木生立不申候亦右峯地之間廣く候て其場所へ卑き岳有之候は、澗地之上敷より相増候事

第十二項

一柚山之儀人作次第盛衰有之候抱護堅固相閉諸木能立候得は山氣相含諸木自然と高く立延其山盛り申積に候亦抱護閉口之諸木伐開候得は山氣相洩山奥迄漸々諸木相痛其次に生立候小木は高不相立終には藪山と相成候依之抱護閉口之場所可成程外一番目之閉口

より樹木植茂り候儀專一に候若畠敷少く百姓飯料難續所は無是非二番抱護より可閉置候事

附抱護閉口の場所より致山工候儀不可然候

第十三項

一作毛之儀は土地之性相撰申事候得共柚山之儀は土性不相構山形次第樹木善惡有之事候依之柚山敷地之儀は題目山形を致吟味候然共右敷地之内山敷よゝて雖爲不相應之所諸木植付候得は始ては立兼或曲木に成候得共

漸々と山氣を含其次々小木よりは能立延可申候間山敷針竿之内は少も明地無之様に可入念事

第十四項

一抱護之内辰戌丑未四ヶ所之方相欠候所は四維之病とて樹木絶て盛生不仕候其内一ヶ所よても相閉候得は其病相迦候山敷見立候砌此儀は能々氣を可附事

第十五項

一大木より惣て小木立延素生相勝候山は盛生之始と可心得候亦大木より惣て小木之素生

相劣候は、其山衰微之始と可心得候事
附致山工候砌小木とても能立延候素生之
木は相嗜置候儀肝要に候

第十六項

一對峙並抱護遠近高卑之列合は能く我氣を以
て見計可有之候此儀は口上よて難申述候右
に記置候箇條之趣を以て山敷數見込次第自
然と可致合點候此段可爲題目事

一 柚山養生之事

第十七項

一 柚山之儀山敷見様之法に申述置候通抱護題

目就中其閉口は柚山盛衰之氣脈に相係り別
て肝要に候然處右之閉口焼開伐明置候付て
山氣相洩山奥迄漸々相痛小木之素生前々之
木より相劣終に柚山致衰微候向後右之心得
を以て抱護閉口之樹木能々入念別所よりも
早々盛生させ候儀可爲專一事

第十八項

一 田畠ハ折々草を取除段々養生致し五穀盛生
させ候柚山之儀も同斷候處跡々は捌庫理頭
頭を始百姓等迄右之譯無案内に付て樹木立
兼柚山及衰微候然ハ田畠草取同前と申事は

山工人山入致候時樹木之内拔群立延可申
 素生之木は相嗜其餘の木より用事之長程見
 合伐取之尤伐捨候木之枝は隣所之木よ不障
 様に可捨置候亦百姓手明之砌柚山爲養生或
 は四五人或は七八人山入致候曲木曲枝並落
 木よ隣所之木に相障候等伐除亦兩木摺合
 候木は一本伐捨候歟兩木共其儘立置候歟見
 合肝要に候亦小木之梢に相障候枝則々可伐
 除之候右之心得を以て何連も入精候は、小
 木自然と素生能罷成其山盛立候儀案中に候
 檜木いくかゝの木よその木椎木いちよ杯の

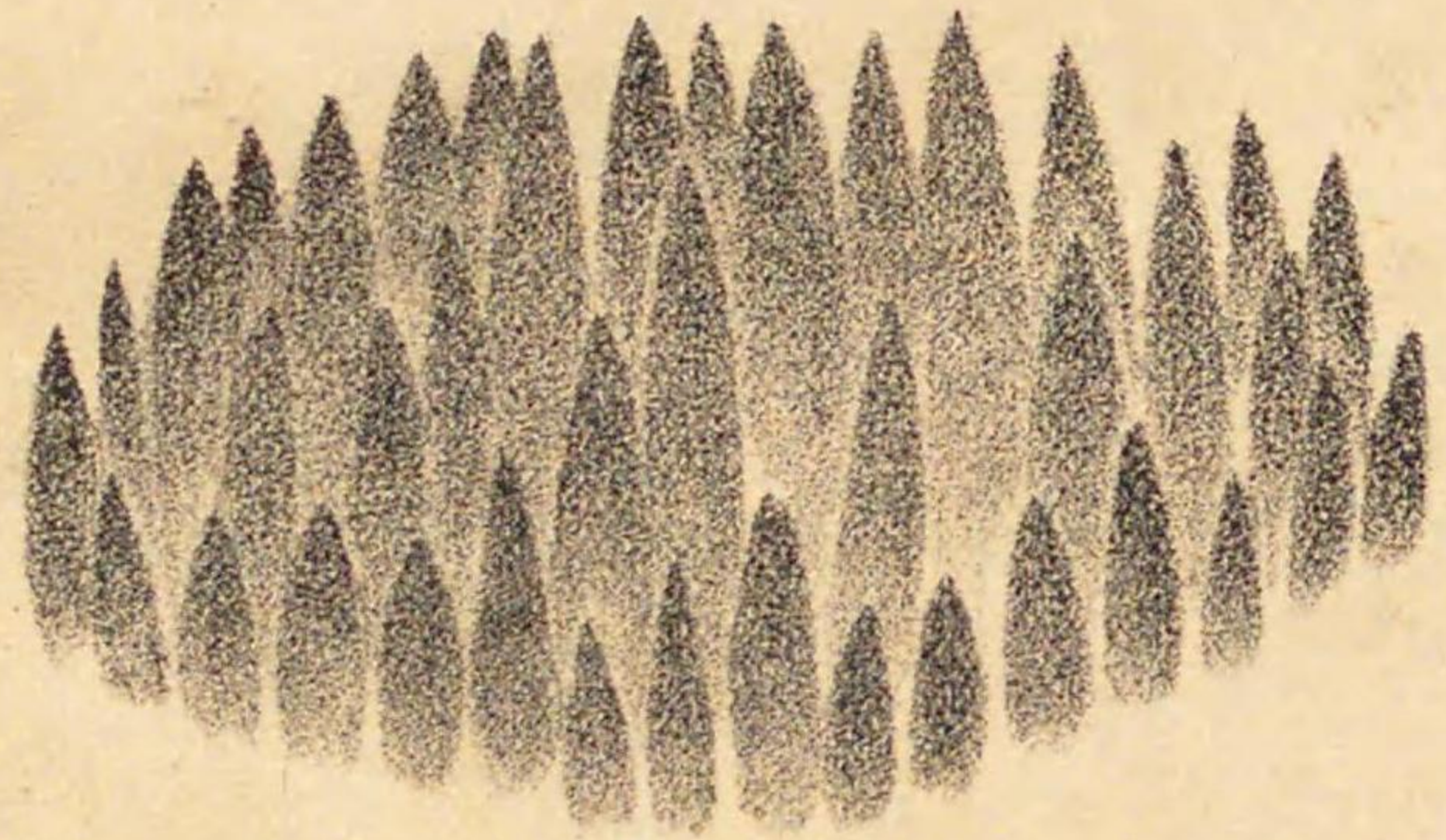
類は不及申に其外の木とても件之通養生致
 候儀田畠草取同斷と申事候此了簡可爲肝
 要事

第十九項

一 柚山よ付て右通入念候は、一日には壹人よ
 て樹木七八百本十人よて七八千本程相助可
 申候村々件之通入精候は、諸山毎に材木相
 揃其後は何分山工致候ても柚山の衰微絶て
 無之却て山工致候程其山養生に罷成申積に
 候跡々は山工之法並山敷見様之法無案内よ
 て抱護之閉所焼明尤樹木之養生絶て無之我

十四
増伐取候を第一に仕候故小木立兼曲木勝に
成行上敷山は中敷相成中敷は下敷に相成下
敷は藪山に相成候右通山敷之位以前に相替
候に付て山工人共も最早遠方に罷越致山工
手隙を費候儀甚以て愚昧之至に候向後能々
入念山法之通相働候は、小木立延藪山迄も
樹木相揃山工も致安く百姓之爲勿論之事候
國頭方中頭方諸山之儀何方も従前々山位拔
群相劣候儀畢竟山法無案内故に候此段能々
可有了簡事

遠山樹木見様之事

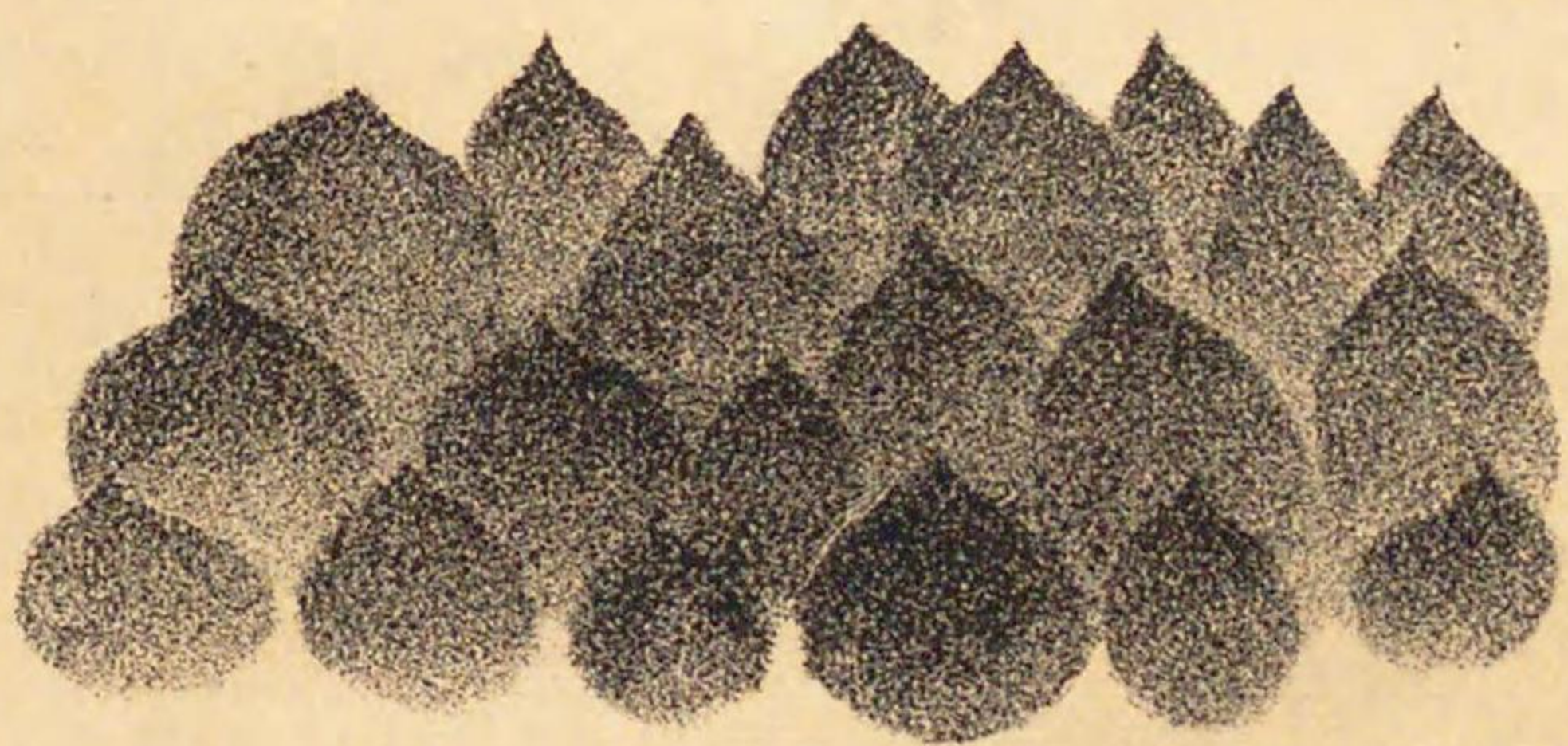


第廿項

右圖之様に樹木之梢相揃延立候所は苦山に
可心得候事

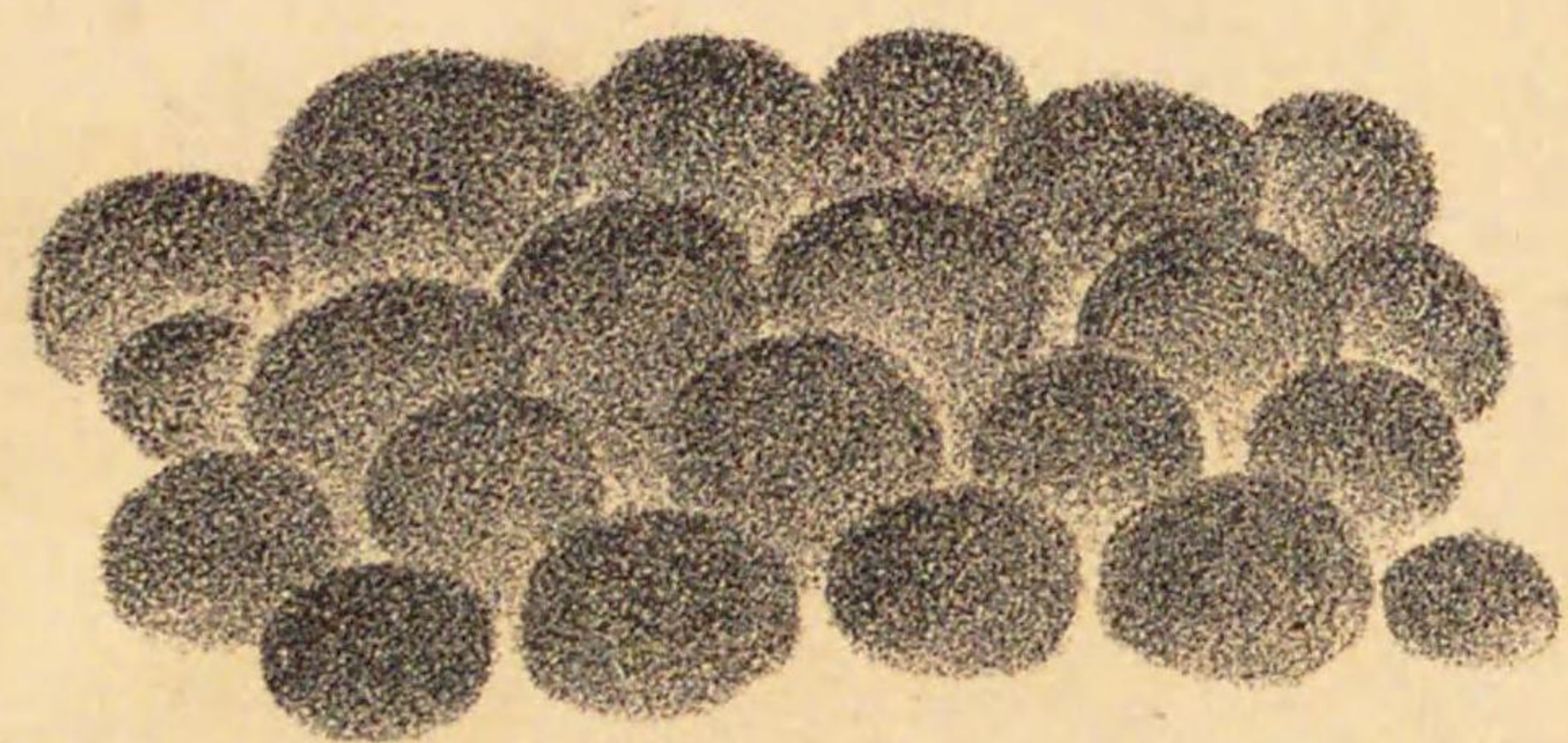
第廿項

右圖之様に相見得候山は樹木程來相揃盛初之山と心得候事



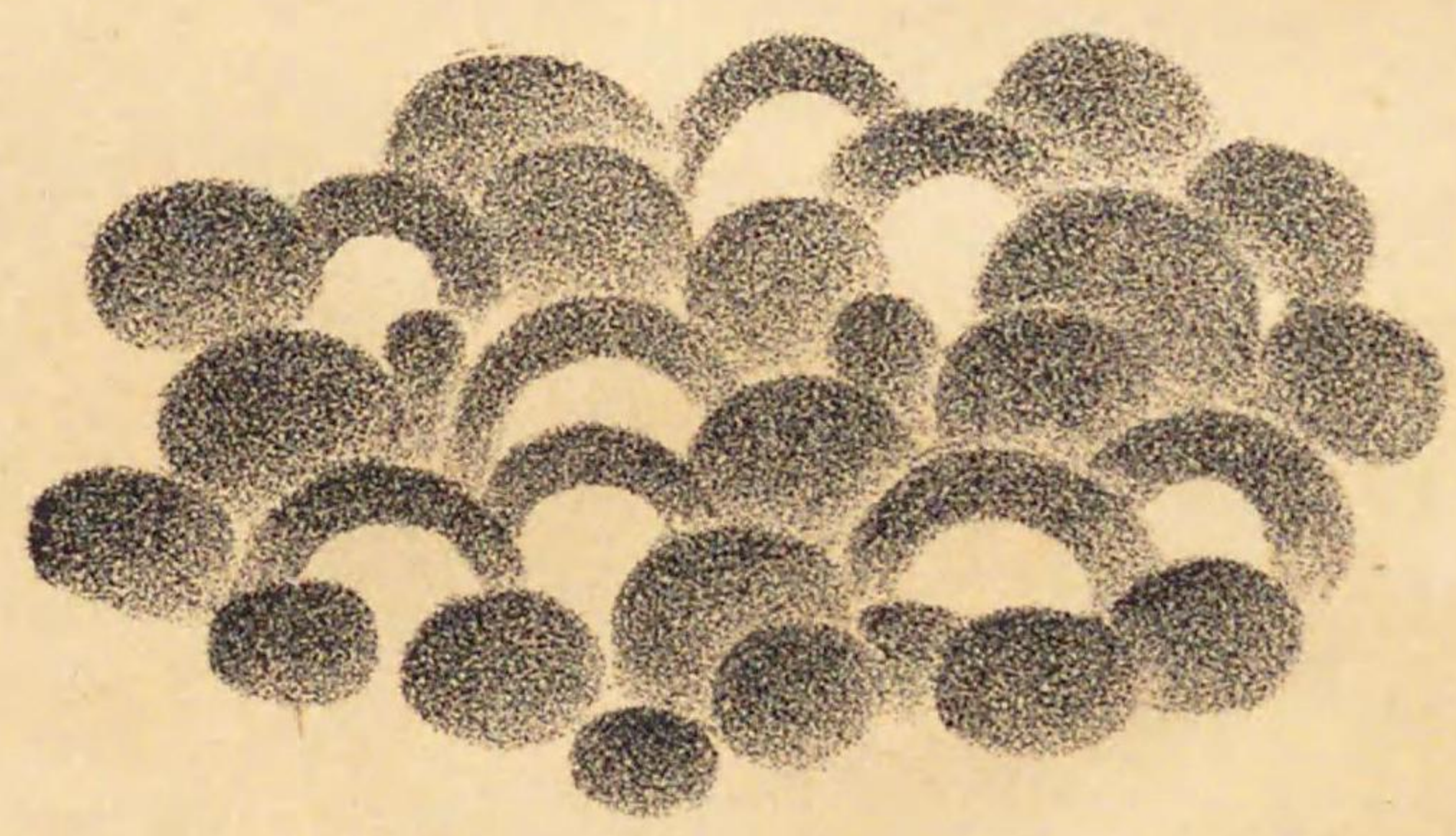
第廿二項

右圖之様相見得候山は盛生相宛候山と心得候事



第廿三項

右盛生相宛候山右通所々ふけ目相見得候は
其所材木伐取爲申こ可心得事



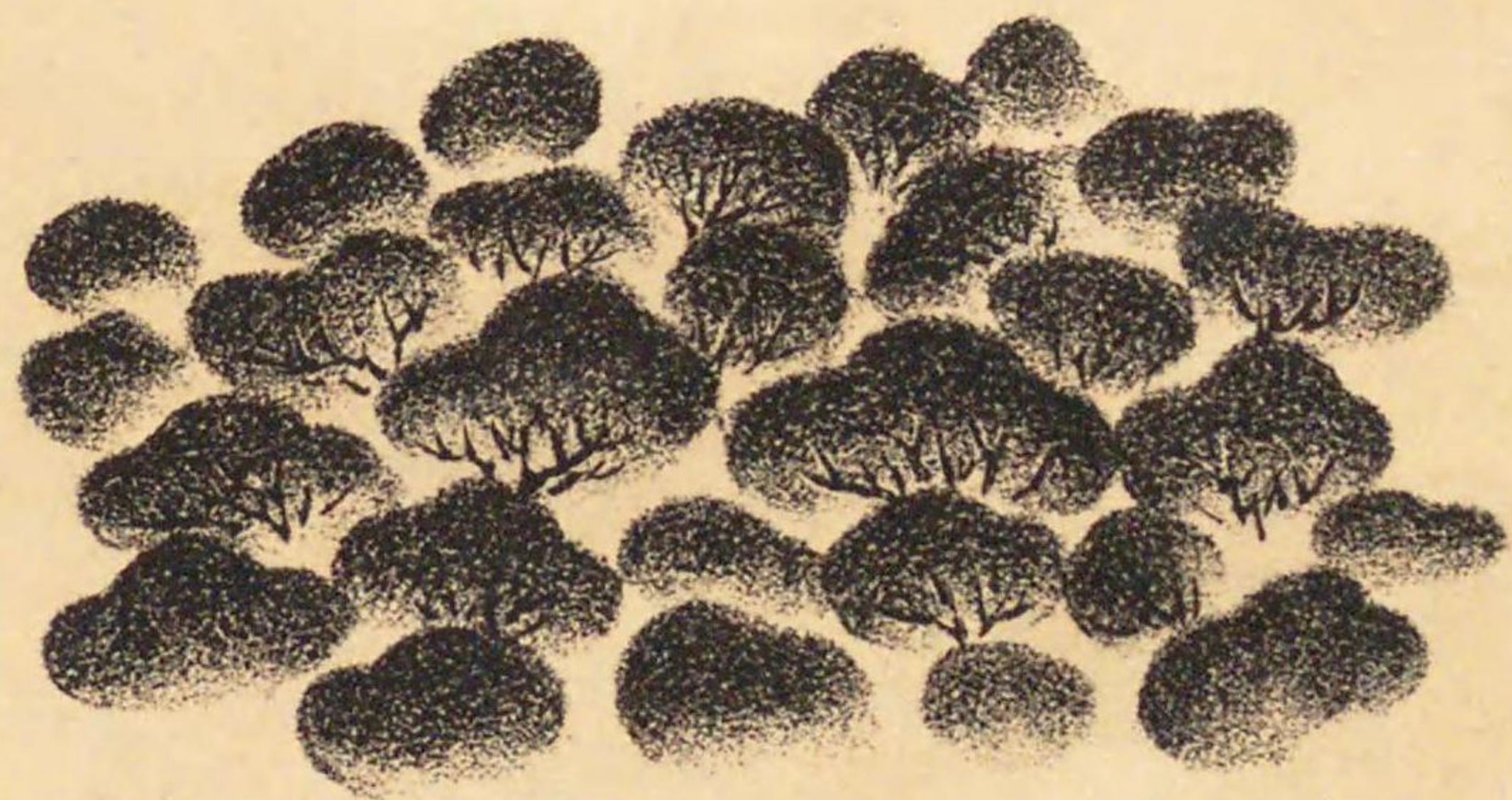
第廿四項

右通弁之枯枝之様に所々木白枝相見得候山は能
木猶残り候得共大木多伐取候山こ可心得候事



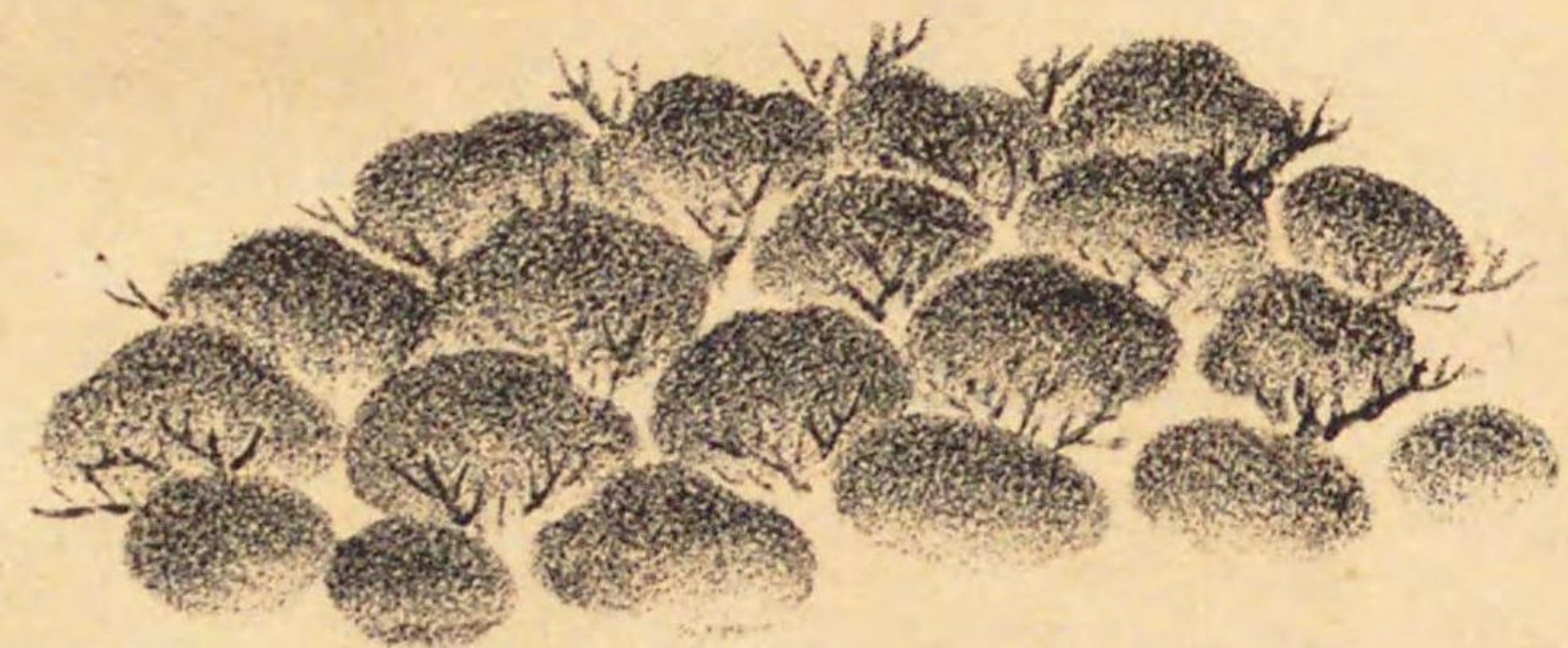
第廿五項

右通木之白枝過半曲枝逆枝に相成候山は能
木稀有之衰山と可心得候事



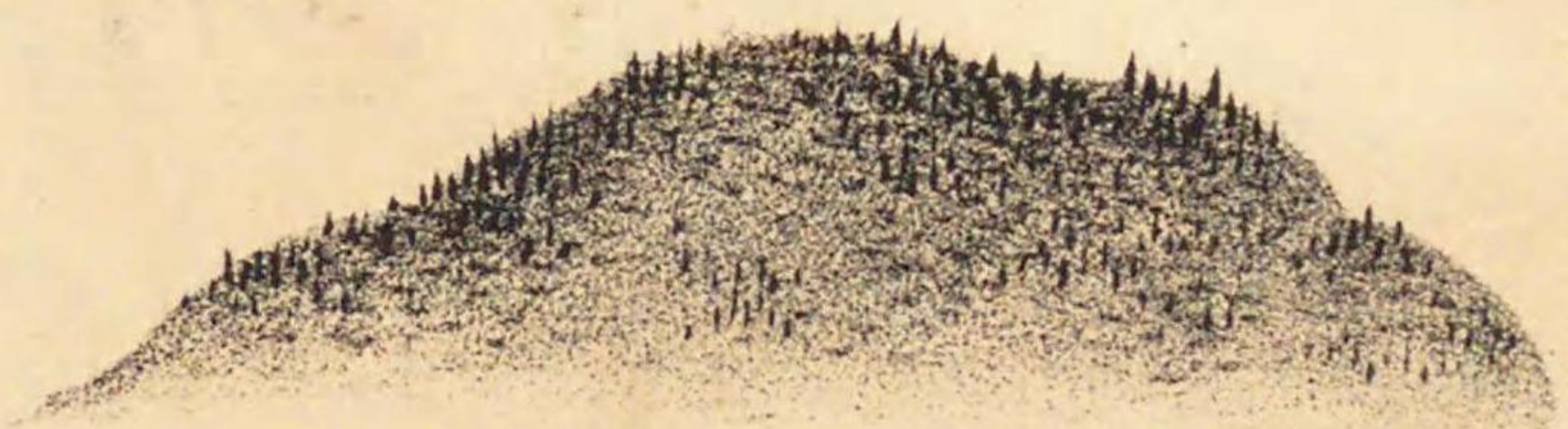
第廿六項

右通枯大枝并枯木等諸木より差出相見得
候は、至極相衰候山と可心得候事



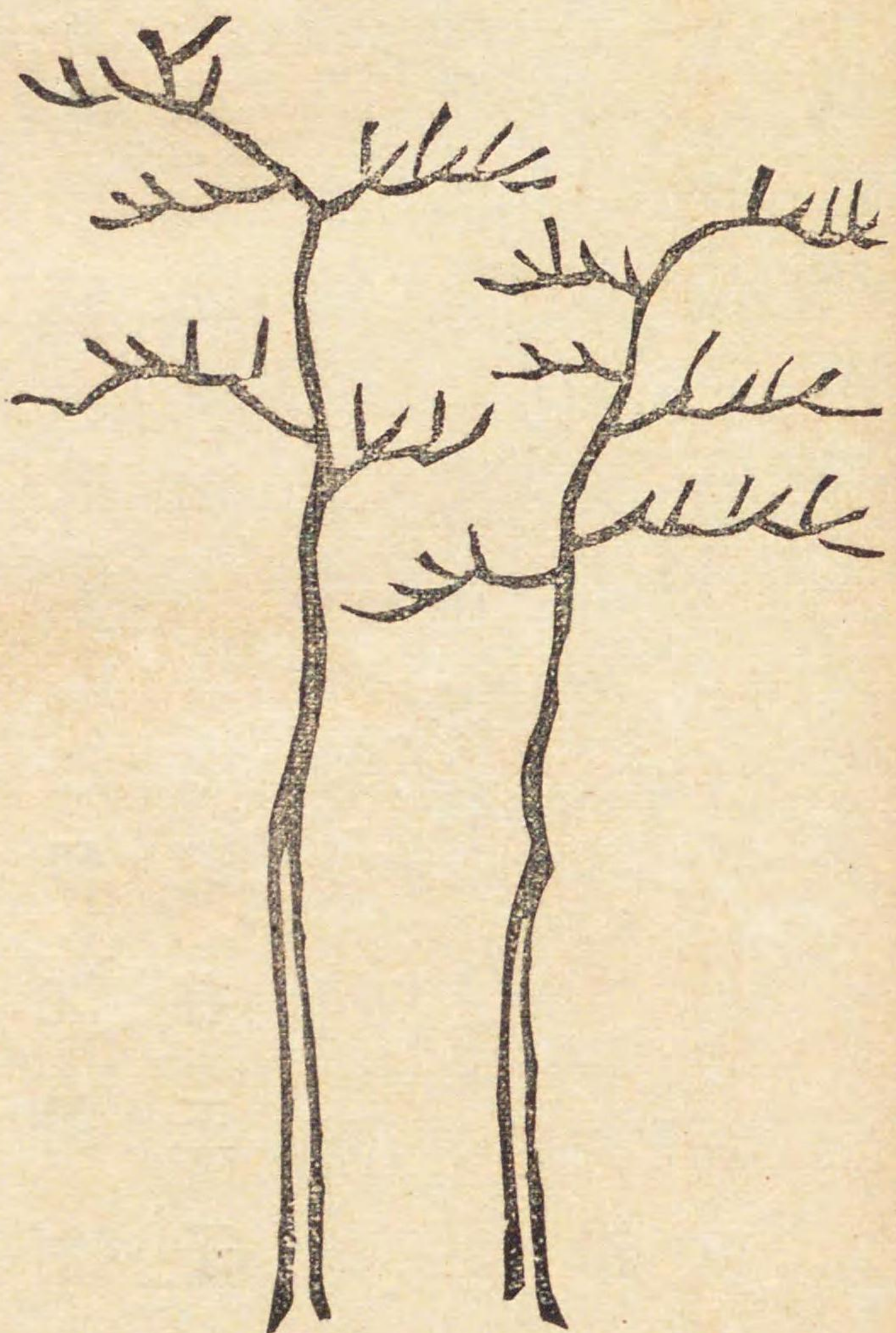
第廿七項

右通木之枝葉相茂り芝草を詰候様相見得
候山は藪山と可心得候事



第廿八項

右通諸木之儀其眞之梢相まかり四方に枝差
候は、其高相究り候木と可心得候事
右之通堅固可相勤者也



評定所

乾隆二年丁巳三月

識名親方

具志頭親方

伊江親方

北谷王子

山奉行

山奉行所規模帳

第一項

一前々は中頭方之内北谷讀谷山越來美里具志
 川五ヶ間切山よりも材木出爲申事候處最早
 相絶仮屋材木をも達兼且又金武恩納名護本
 部今歸仁五ヶ間切山も頃年大木相絶候付當
 時大材木は羽地大宜味國頭久志四ヶ間切山
 より乍漸取出申躰候右四ヶ間切山も無程
 大木相絶申積罷成別て心遣仕候依之山方
 爲下知國頭方へ山奉行二人筆者六人中頭方
 へ山奉行一人筆者二人被召立御物座差引を

山奉行所規模帳

以山方下知爲仕候段及言上奉行筆者被召立候事

第二項

一 惣山當並村山當之儀は萬端山奉行差圖を受隨分出精柚山盛生爲仕候様よ可相働旨可申渡候且又地頭代事一ヶ間切惣頭役候間折々山奉行へ相付山中致見分柚山之爲何篇百姓不知方入念候様可申渡事

第三項

一 此中大材木御用之砌は恩納名護羽地三ヶ間切金武久志本部三ヶ間切今歸仁大宜味國頭

三ヶ間切宛組合よて取調候故何れも摸合山之筋よ相心得樹木大切よ不存且又右木挽出候道筋作り候とて跡先き之計も無之諸木太分伐除其上大勢相集或は七八日或は十日十分四五日餘も山中へ令滯留候付て仮屋作用其外何角付て太分木伐禿候此儀木絶之基尤遠方差越致山入候儀百姓之痛よ罷成候故向後一ヶ間切宛各山持切よ御用木取調候摸よ申付候此旨堅相守各山大切よ可相心得旨可申渡事

附他間切山へ忍入致山工候は、科錢百貫

文申付五拾貫文は披露申出候者へ相渡五拾貫文は山仕立料も可申付事

第四項

一橋木並大材木其外何角も付材木御用有之砌は國頭方九ヶ間切中頭方五ヶ間切各有所多少見合頭高も應へ賦入取調候様可申渡事

第五項

一御普請を初脇方家作並諸船大小之作事皆木を以相調候儀は勿論之事候燒物かゝ物衣類其外萬事之品物も皆共木を頼候て相調申物候然は世上當用之材木類迄唐大和へ誂候儀

は絶て不罷成候故柚山之儀別て大切も申付候間萬端其心得を以柚山盛生爲仕御用並世上之用事をも相達候様能々下知可有之事附柚山燒明候企を以致出火候者は國土之妨候間一世之流刑可申付事

第六項

一唐船おいきやかんだん中かゝり可成程來之木甚少く成來候儀は畢竟くり舟作調申故候夫付て當日諸浦諸島へ有合之くり舟相算させ候處貳千七百艘餘も及申候此舟數八ヶ年目も作替候例を以相考候得は一年も大木三

百四拾本餘禿行申候六七拾年八九拾年を経候大木を無了簡よ伐取り舟よ召成候儀甚以不可然事候向後くり舟作候儀堅令停止當時持合候くり舟爲締焼印申付候小舟無之候て不叶所はえき小舟よて用事可相達候尤えき小舟を作候て商買仕候儀令免許焼印も申付よ不及候間其段可申渡事

附密々大木伐取り舟作候は、流刑可申付候尤加勢仕候者は壹人よ付科錢百貫文申付五拾貫文は披露申出候者へ相渡五拾貫文は山仕立料よ可申付事

第七項

一右通おいきやかんだんよ相成候松之木絶行候付て右差足用はいちよ椎木より見立御用木帳よ可記置事
一唐船中艀木之事 一舳艀木之事
一艀木之事 一おいきや木之事
一かんとん木之事 一檣木之事
右之木肝要成御用木よ候間片割仕候者は科錢三百貫文申付百五拾貫文披露申出候者へ相渡百五拾貫文は山仕立料よ可申付事

第八項

一唐船。楫本木は必かゝの木よて相調申候其餘
 之木を用候儀不罷成事候然は御本殿御普請
 之時從跡々かゝの木相用又砂糖車も右木よ
 て相調申候故當時楫本木可成程來之木は國
 頭方へ僅有之御用筈合候哉心遣仕候依之御
 普請御材木之儀別木を見合候處九ヶ間切山
 へよむの木有之御普請ふ相用相應之木候間
 向後かゝの木よむの木は大小共伐取儀堅禁
 止申付候尤砂糖車之儀は短木ふても可相濟
 候間かゝの木よむの木共壹丈以下之木より
 見合取調候様可申渡事

附かゝの木よむの木私用ふ付て伐取候は
 大小共一本よ付科錢百貫文申付五拾貫
 文は披露申出候者へ相渡五拾貫文は山仕
 立料よ可申付事

第九項

一柚山之儀是程迄及衰微候儀は山敷見様之法
 不案内よて抱護之閉口焼明伐明置候付て山
 氣相洩山奥迄相痛候は一又柚山養生之法不
 案内よて致山入候付て樹木相痛終よ柚山及
 憔悴候は一又畠作を好候て跡先之計得も無
 之山敷無理よ焼明置候は一右三ヶ條を以柚

山致衰微爲申事候向後能々山法相守跡々之
通柚山致盛長候様可入精旨可申渡事

第十項

一山盛生無之内私用よ致山工候は、左之通科
申付科錢之儀半分山仕立料半分披露申出候
者へ可相渡事

但山當内通よて盜取候は、山當は役儀召
迦盜取候者同斷科可申付事

第十一項

一大船櫓木盜取候は、流刑之事
但山當は神宮寺準寺入科錢五拾貫文可申



付事

第十二項

一同中楯木舳楯木艦楯木梶木おいきやかんだ
ん木盜取候は、壹本よ付科錢貳千貫文

但山當は龍福寺へ廿日準寺入科錢貳拾貫
文

第十三項

一抱護閉口之儀は柚山盛衰之氣脉よて候間諸
木早々致盛長候様可入念候尤土手外之儀は
畠作仕飯料相營候分相除餘は里山仕立候様
よ可申渡事

第十四項

一中頭方山之儀諸御用木外之木とても山奉行無引合私用よ盗取候は、壹人よ付科錢八拾貫文可申付事

附四拾貫文は披露申出候者へ相渡四拾貫文は山仕立料よ可申付事

第十五項

一山工人は則耕作人同前候間樹木高く立延候様よ隨分入精候儀肝要候前々之木より漸々相劣候は、其山可致憔悴候依之山工之法よ立勝候木は小木とても相嗜其餘之木より見

第十六項

合梢之立留り候等伐取可相用之候砂糖樽並きち木取調候砌も右之心得を以高立不仕候木を見合伐取之尤任取安きふ一所より大分伐取間敷候此儀は柚山養生之法よ委細申述置候老若共委く可申渡事

一山敷之儀土手針竿を以差分置候間當分明地ふて有之候共其場へ差入作職仕候儀堅禁止可申渡事

附相背致作職候者は其敷地壹坪よ付科錢壹貫文宛申付山仕立料よ可申付事

第十七項

一土手内牛馬羊放候者科錢貳拾貫文申付拾貫文は披露申出候者へ相渡拾貫文は山仕立料ふ可申付事

第十八項

一檜木之儀國頭間切之内安田安波大宜味間切之内喜如嘉久志間切之内川田右四ヶ村之山は實付候程來之等所々相見得餘は實生之小木相應ふ有之迄ふ候右之小木は國頭間切諸村毎ふ有之候大宜味間切は平南津波鹽屋渡野喜屋山之内小檜木少々相見得候然

第十九項

は檜木致商賣候儀一節禁止申渡置候處右通伐絶置候付ては其科可申付候得共此節迄は令宥免候向後出精檜木早々致盛長候様可相働候且又檜木無之間切は村毎ふ敷地見合苗植實植入念以後御用其外世上之用事迄相達候様隨分可入精旨可申渡事
附檜木商買之免許無之内は伐取候は、大
小共一本ふ付科錢百貫文申付五拾貫文は
披露申出候者へ相渡五拾貫文は山仕立料
ふ可申付事

一 いく木之儀近年伐絶置候付盛生不仕内は四寸角より五寸角迄之木を商賣差免三寸九分より以下之小木伐取商賣致候儀一向禁止申渡候事

附相背三寸九分より之小木伐取候は、壹本より付科錢五拾貫文申付半分は披露申出候者へ相渡半分山仕立料より可申付事

第二十項

一 仕立候諸木之儀先き様盛長仕候は、右之内御用より相立候分は差除餘は百姓中商賣可差免候間其内一向不伐取様可申渡事

附免許無之内より右之仕立木伐取候は、一本より付科錢百貫文申付五拾貫文は披露申出候者へ相渡五拾貫文は山仕立料より可申付事

第廿一項

一 柚山近邊より有之候田畠原々之儀跡々は拾間より三拾間迄場所次第明除候得共向後明除候儀堅召留針竿を以山境差分候間右田畠へ相障候木は枝計透取候様より可申渡事
附針竿内明除候は、其敷一坪より付科錢壹貫文宛申付山仕立料より可申付事

第廿二項

一 檣木並唐船大楷木。當時筭合候程來之木並以後其御用。可成素生之木は山中山外共一々見立且大御普請之時。柱桁梁木引物木。相成候程來之木並以後其御用。可立素生之木は一々見立皆共御用木帳。可記置事。附御用木帳。載せ置候木致片割候は、一本。付科錢五拾貫文申付。半分は披露申出候者へ相渡。半分は山仕立料。可申付事。

第廿三項

一 船楷木之儀前々。取。仕太分木之費。相

成候付先年國頭方九ヶ間切へ。取之仕様。稽古申付木引八拾九人頭引。召立置候間。彌以々後共。取。可仕候其外之木も。取。仕可然木は猶以。取少も木之費。不罷成様。可相心得候。夫付ては木引人餘多罷居候程。柚山之爲。可相成候間。斧取同前致繁榮候様。可申渡事。

第廿四項

一 船楷木並諸御用木。取調候。砌寸法不足之木を伐取候ては。其用。不相立木之費。相成別て。不可然事候間。御用之長尺廣さ厚さ能々見究。

伐。調。候。様。一。山。師。並。山。當。へ。可。申。渡。事。

第廿五項

一松之木之儀素生惡敷船楫木も不罷成木を
見合片割可致之處無了簡も素生能木を致片
割置候儀且又何木ふても入用之尺を見合可
伐取之處無了簡ふ長き木を伐倒用事之外徒
ふ捨置候儀甚以不可然候此段男女共可申渡
事

附右通之無了簡仕候者は科鞭十可申付事

第廿六項

一萬一山中へ出火之儀共有之候は、他間切と

ても其最寄之頭々百姓早速馳集取消候様も
可相心得旨可申渡事

第廿七項

一野燒並炭燒仕候砌は其場所風根等相考火之
輕我無之様も入念尤炬火々繩火も其慎を以
不致出火様も可相嗜旨堅く可申渡事
一附火之慎無之柚山も相掛て出火之致輕我
候は、燒明候山敷壹坪も付科錢壹貫文宛
可申付候尤何村之人致出火候儀は決定候
得共何がと取出し不申候は、右之科錢
其村中へ申付山仕立料も可申付事

第廿八項

一 梓木秋木山黑木楊梅皮致脇賣候儀從前々禁
止申付置候趣猶以相守候様可申渡事

第廿九項

一 國頭方九ヶ間切並諸島へ當時持合候船數相
改させ焼印申付置候間右之船作替又は新敷
作調候節九ヶ間切は構之檢者並山奉行次書
諸島は在番人次書を以作事之願申出候は、
遂吟味免許可有之候條右免許手形見届之上
作調候様よ申渡尤作事相調候は、焼印可申
付事

第三十項

一 馬艦船之儀帆反積高之定無之漸々大船勝よ
作調候よ付吟味之上帆反積高並船數相定置
候間右之船作替候節那覇久米村は御船手奉
行泊は頭取次書を以作替之願申出候は、免
許可有之候條右免許手形見届楷木寸法定帳
之表取調させ帆反積高無相違作調候様よ可
申渡事
附楷木寸法定帳一册相渡候且又右船作調
候は、御船手奉行へ其段間合可申越候左
候は、於彼方焼印可有之事

第三十一項

一 惣て燒印迦之船は取揚候摸し申付候間若燒印迦之船有之候は、其段可申出事右之通此節規模相定候間堅固可相守者也

評定所

乾隆二年丁巳三月

識名親方

具志頭親方

伊江親方

北谷王子

山奉行

柚山法式仕次

第一項

御當國柚山敷之儀少有之候付永代國用相續仕候儀難計念遣至極し付先年柚山法式を以委曲申渡置候旨趣得と致落着能々柚山養生又は仕立方入精不申候得は法式之旨趣致相違却て柚山之爲不罷成終國用相欠可申候因茲左條之通申達候

第二項

一 御本殿之儀かゝ木材木よて御普請仕候故貳拾年餘し一度つゝ御普請改候付御物入は不

及。申。諸。士。百。姓。等。迄。相。痛。候。儀。何。き。も。存。知。よ。て。
候。右。御。普。請。檜。木。材。木。よ。被。仰。付。候。は。永。代。相。
保。御。物。入。相。減。諸。士。百。姓。痛。も。無。之。積。よ。て。近。年。
檜。木。仕。立。方。申。渡。置。候。彌。盛。長。候。様。可。精。入。候。

第三項

一 公義を始脇方普請材木之儀一番檜木其次い
くいちよ椎木相用候右之木數第一之用木よ
て候間其了簡可爲肝要候

第四項

一 普請材木之儀檜木いくいちよ椎木は肝要成
用木よて候然は其木數無之山は所々見合少

々よても可植付置候左候は、其木之實付候
時分は山中實之入渡終よは右木數勝よ可罷
成候間能々其了簡可爲專要候

第五項

一 渡。唐。船。並。諸。船。不。依。大。小。松。楷。木。よ。て。致。作。事。尤。
燒。物。用。之。大。薪。も。松。之。木。相。用。候。專。松。之。木。は。太。
分。仕。立。候。程。國。用。之。爲。罷。成。候。間。其。了。簡。可。爲。肝。
要。候。

第六項

一 諸木之儀上中下之差別有之候得共皆以用木
よて候檜木松いくいちよ椎木ともんかゝ木

等之外如何程下々之雜木とても五六尺立延候得は百姓等之家作用は可相達候縱令尺廻候共砂糖樽よは可相成候間樹木之内何木よても曲木よ不罷成様山法式之旨趣具よ可相守候

第七項

一杣山里山之内松雜木相應よ立延もはや用木よ罷成候木切明檜木いくいちよ杣仕立候儀不了簡之至不冝候右木數仕立候場所は無用之曲木小木見合切明可相仕立候尤杣は素生能相延候故專帆檣之用よ相立候間嶺地之能

場所見合土拵入念法式之通穗を撰場所次第或拾四五本五六拾本或數百本數千本も可差付候雖然杣差用とて其場所よ立延候木伐明候儀不冝候間其了簡可爲肝要候

第八項

一古山は諸木之古根多々有之候故少々立延候小木有之何程養生仕候共然々之山よは不罷成積よ候故漸々場所見合切明諸木植替差替可精入候

第九項

一杣山之内よび薄こをび之類萌茂り候所は

諸木之實も萌立不申終よ藪山よ可罷成候間
則々切除諸木之實入渡能萌立候様可相計候

第十項

一 柚山之儀諸木漸々立延候を肝要よ可仕候諸
木延兼曲木勝よ相成候得は柚山之衰と可相
心得候然は諸木立延又曲木勝罷成立兼候儀
は畢竟山工人之善惡次第よ有之候山工人山
工之正法を以致山工候は、如何程衰微之山
よても漸々諸木立延終よ柚山相榮可申候又
山工人心之儘致山工候は、如何程榮候山よ
ても諸木漸々曲木勝よ相成終よ藪山よ可罷

成候間此段山當山師へ能々申聞せ百姓中山
工之正法相守候様折々可申付候此儀柚山題
目之務よて候

第十一項

一 桐杣杉檜も三とが楠類は他國より申請皆以
國用題目之木數よて候右仕立所之儀跡々有
來候諸木不相障場所地合見合隨分入念可相
仕立候然共右之木仕立候とて柚山内立延候
樹木切除又は柚山抱護之場所切明候儀甚以
不冝候能々其了簡可有之候

第十二項

一 柚山之養生題目抱護並其閉肝要候抱護並其閉相損候は、其内之樹木漸々及衰微候儀必定之事候然處抱護之閉然々不仕剩抱護之樹木迄も延立不申所多々有之不宜儀候此旨得と致落着抱護之樹木隨分爲致盛生就中抱護之閉は早々樹木盛生候様可精入儀肝要候

第十三項

一 柚山敷少く有之候間切は松雜木隨分盛生させ候働肝要候右通少く有之候山敷へ檜木枹杯過分仕立置候は、平常渡世之用木少く罷

成却て間切之爲不罷成積候縱令一ヶ村もても山敷少く所は能々其了簡可有之儀可爲肝要候

第十四項

一 柚山之内曲木勝り相成候場所可成程は山工之正法を以其山致養生候儀可爲肝要候然共至其期に能々吟味之上山養生は却て遅立仕立方は早く候筋に致議定候は、其見合を以切開檜木いくいちよ椎木松之類植付盛生させ候計へ專一候

第十五項

一 桐木之儀實取候を題目よて枝數出高立不仕
 様仕成候儀肝要よ候餘木之儀桐木とは格別
 如何よも延立候を題目よ候然は餘木と桐木
 とは其用事相替素立様も別々よ可有之候處
 柚山壹所よ相素立候儀柚山本法よ致相違不
 宜候然共桐木は御當國始て之仕立候故此程
 は柚山内よ仕立させ候得共最早桐木本數多
 罷成候付向後柚山内よ仕立候儀は一向召留
 候山野内場所見合手廣相仕立候儀國用之爲
 候間其計へ可爲肝要候尤當分柚山内よ仕立
 置候分は能々抱護之木相堅桐木盛生候様可

相計候

附 桐木敷之内桐木よ不差障相應之作物い
 九一候儀差免候

第十六項

一 柚山内樹木仕立候とて藪山薄原之場所能と
 燒明伐明年季を以作毛仕來候得共右之仕様
 よては却て山氣相洩柚山之爲不宜候間向後
 召留候尤右之場所は法様之鱗形を以伐明諸
 木種子蒔入盛長させ候儀可爲專一候

第十七項

一 喰實敷之内如何よも村近き所は法様之通土

地相拵芋葛植付入念致手入候は、芋出來増
 堀取候も輒罷成飯料緩と可致相續候就中志
 、垣も村近きへ相圍候は、手隙之費も無之
 尤喰實外之山野よは隨分松木雜木盛生させ
 候は、材木薪木類取出候儀も手早く有之旁
 可宜之處却て致不堪跡々より村近方之所よ
 も苦土澁土とて徒よ捨置候地方のそ有之不
 案内至極候依之土地之拵様委曲左よ相記候
 間法様之通作毛隨分可入念候

附

一苦土澁土と申場所は深さ壹尺四寸切返

上之方七寸は陽土と申候下之方七寸
 は陰土と申候然は上之方切返候七寸
 之陽土は下よ成下之方切返候七寸之
 陰土は上之方よ成十二ヶ月之風氣を受
 させ夫より上下共切交候得は土性能相
 成致作毛實取候も丈夫有之候尤之
 相用へ候は、彌以土性丈夫よ可罷成候
 間其心得肝要候
 一法様之畠拵仕十二ヶ月之風氣請させ候
 儀は下位以下之畠よて候中位以上之土
 地は法様之拵迄ふていもがづら植付風

氣請させ候よは不及候

第十八項

一國頭方之儀何程蕃積作立候ても首里那覇へ
毎日賣出候儀絶て不罷成儀ふ候然は家内人
數定式之飯料緩と相濟候様畠敷相考芋作立
候は、飯料之心遣少も有之間敷積ふ候處各
持合之芋入畠は致大形却て山野ふ致作毛候
儀を專ふ心掛柚山之故障ふ相成候儀畢竟跡
先之顧無之故ふ候因茲右申渡候土拵之法様
隨分入精持合之芋入畠題目入念相拵其畠よ
て家内飯料可相營候乍此上不足候は、村近

方之山野内より不足分之敷地相考是又法様
之通土地拵仕可致作毛候右通相計へ候は、
其餘之山野は自然樹木之實飛渡終よ其村々
之重寶よ相成旁勝手能可有之候雖然百姓等
はケ様之了簡絶て無之積候間大さはくり並
掬山當耕作當其外前役人村所之頭々隨分一
心よ相成件之旨趣致得心百姓中叮嚀よ加下
知候は、其身は格別子孫之爲又は國土之御
奉公肝要之勤よて候
右は乾隆二己年三月柚山法式を以申渡置候
得共此節又々法式仕次相調申渡事候間右之

旨趣得と得其意相携候役々へ委曲申渡入念
可相勤者也

評定所

乾隆十二年丁卯九月

宜野灣親方

譜久山親方

具志頭親方

山奉行

樹木播植方法

杣穗差様

第一項

一杣は能々穗撰不申は不叶者候間圖の通素生
能物を見合去年翠の所より三四寸程付候て
可伐取候可成程は眞の穗宜かるへく又は二
三番之枝穗も見合可相用候將又其餘の枝穗
よても素生能候は、是又可相用候尤脇枝眞
よ相勝り能立延候等有之候は、其眞は切去
り脇枝を眞よ成く可相用候



附

一 去年翠之所は赤色よ有之候間其見合を以て可切取候穂とけ様口傳

一 眞の穂相用候ては本木用立不申候間穂差付候時分相考へふけ取(透伐ヲ云フ)可相用候左候は、木の費無之旁可宜候

一 穂拵は小枝眞の方よ二三段計相残り一刃よ尖げ候心地可致候馬の耳形よとげ又三角よとげ候事も有之候得共馬の耳形はとげ所餘り長く相成不宜候迎もの事三角切は宜有之候

第二項

一 敷地拵は兼て差渡一尺五寸程よ深く打起置可成程兩三度つゝ打返し些堅まる時分能く土熱見合串よて差入其後穂とげ差込踏と堅め折々草可取除候

附 差付候時餘り潤ひ過候ては不宜候間其

見合肝要の候

第三項

一穂拵候て即々差付候方能く有之候得共大分の働よて難相達候は、根本水よ浸し置格護可致候尤水よ浸し候時清水よ却て濁り水よ浸し候方可然候濁り水よ浸し候得は其穂潤宜活付も能く有之候尤濁り水よ浸候は大木よ成り木目よ濁り染付申由候得共本來右沙汰ふて無之木の素生ふ社そ可有之哉赤杓黒杓或は江戸杓と申候て各木性相替り候

第四項

一穂傾候て東よ向け差付候儀本法よ候然れ共山形次第よ候山の頂きよそ急(真向ふ)可差付候峯地よは山の頂よそ急横様差付可申候間其見合肝要の候

第五項

一穂差付候時限は正月初翠り未だ發生せさる内宜有之候二月初め頃迄は漸く相濟候杓種子植様

第六項

一實九月よ先熟之時分見合取候て莖よ縦け日よ干し策よて打實悉く打盡さよて半分

程も打残し共よ可蒔入候穀の中よ能活出
申物よ候

附實熟致し候時分は色赤相見得候

第七項

一土拵は如何よも肥土乾過無之所可成程兩三
度も打返し少し潤有之時分蒔入尤木蔭無之
日當強く候は、日覆致し右の苗高五六寸程
立延候時分採取可植付候尤節は正二月よて
候こそし様は（株土を附けて）本毎よ土不散様
こそし植付候得は枯も無之盛生宜有之候

第八項

一杓仕立候敷場は抱護對峙相揃嶺地廣く土地
深く所見合兼て差渡壹尺五寸程深打起置候
て可植付候

桐木仕立様

第九項

一八月之頃實自落候を拾取たわらよ入皮のや
わらけ候時實相調部植付左候て敷場風當り
無之様可成程嶺地又場所よよ潤地も能々
溝を捌濕を下け候得は可相濟候猶又種子植
付様は兼て二三尺廻程深打起置一粒つゝ可
植付候

附

一 植付候て四年目よる實相付申物よて其儘
 生立せ候ては餘り立過枝數無之實付少有
 之候間毎年十二月之頃眞を可摘候左候得
 は春毎よ枝數多差出實付相増申候尤植付
 候尺間は三尺程可然候
 一 一所よ寄苗仕候は、落葉の時分こそよ可
 植移候落葉不仕内植付候得は過半相枯申
 候緞令少々植付候ても盛生遅不立候
 松仕立様

第十項

一 松は實植可然候苗植は大木よ成り終よ朽入
 多出來然々用立不申候間嶺地又は平地廣大
 の場所見合二三尺程打起し草根鬚け取除又
 拵よて五六度も雨よ打堅めさせ如何よも手
 廣可相仕立候

第十一項

一 種子取候時分九月之頃實の皮赤色付開眼よ
 相見え候等もり取蒔よ翻け日よ干し策よて
 可打取候

第十二項

一 苗松取様實付候松近邊打起置候得は自然よ

種子落萌出可申候右よ付炭薪木杯伐採候山
よは所々よ種子松相残すべく候

柞木仕立様

第十三項

一 柞木は山氣の能相含え候敷地貳尺四寸の間
よ差渡壹尺五寸程深く打起置穴毎よ種子二
粒つゝ或は一粒よても可播植候土覆ひ候儀
三四分程可然候

附 椎木よ木仕立様同斷候尤柚山内よて
候は、猪をけ候間能々了簡可有候
檜木いく木いちよ木仕立様

第十四項

一 種子蒔並苗植付候敷地拵様杵敷同斷其山敷
二尺間よして差渡壹尺五寸程打起置草木の
根鬚小石取除土熱見合候儀杵敷同斷

第十五項

一 檜木種子は潤ひ無搦蒔入土壹分程覆ひ候て
日覆致すべく候土厚く覆ひ候得は結句萌出
兼申候將又早打續候節折々水を掛け見合次
第水壅薄く相用ひ可然候尤苗萌揃日よ當候
ても不痛時分日覆可取除候

第十六項



一 檉木種子五六月熟見合もり取則々水よ入浮
 出候等除け沈み候分取揚可詩入候尤種子取
 集其儘召置候得は早速虫入癩り多相成物候
 間即々細か成土を些と混交し可置候
 附右苗種子詩入候て翌年十二月よ次春
 迄翠り出さる内植付可然候

第十七項

一 いちよ種子八月よ九月迄熟見合もり取日
 よ乾し策よて打ち皮を去り可成程淺く詩入
 候土深く埋め候へは萌出少相成物よ候
 附皮は不取分候て穀とも詩入候ても不苦

候

第十八項

一 いく種子は八月熟の時分もり取皮去り可詩
 入候尤皮去り根は収集移り俵杯よ入七八日
 程召置候へは皮やわらけ候間其時分手よて
 揉み碎き蒔よ翻け日よ干乾し猶又手よて揉
 み穀ともふ可詩入候尤もり取早速もえ調候
 儀殊の外隙取夫丸（人カフノ嵩）の費相成候

第十九項

一 いく苗は高四五寸程相成候分植付可宜候尤
 萌付難く物ふ候間隨分入念土相附こをすへ

く候自然右種子長々格護仕置候は、皮去ら
む其儘如何ふも日ふ干し調置時入候時分皮
去り宜可有之候

柚山内樹木憔悴の所仕立様

第廿項

一樹木憔悴致したる山は魚鱗形を以て相開諸
木相仕立候得は山氣相含能盛生致し候尤自
然ふ種子入渡生産候間其節有來候曲木は山
工（柚取を）致し候程樹木拔群盛生可致候間其
了簡肝要候

廣大野樹木仕立様

第廿一項

一薄原ふて薄高五六尺程相立候場所は薄能抱
護ふて候間魚鱗形相開き内ふ諸木可仕立候
附薄高五六尺程立候は、魚鱗形差渡四五
間程相明け可然候薄抱護は横三尺程可相
殘候

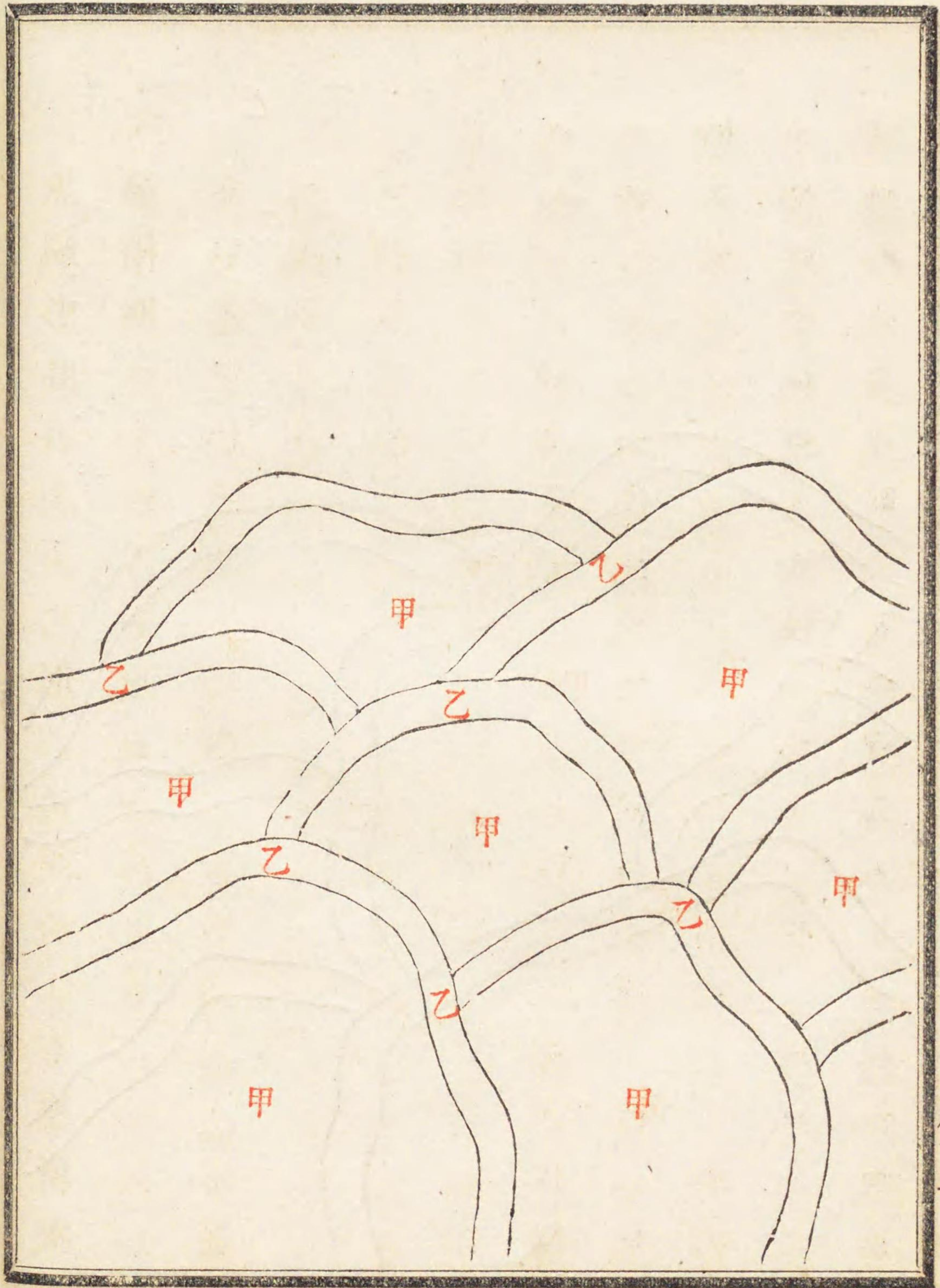
第廿二項

一茅生茂り候地所は茅抱護ふて相濟候間魚鱗
形相開き内ふ諸木可相仕立候
但魚鱗形差渡壹間程相開く可く候茅抱護
は横貳尺程相殘し可然候尤抱護の薄茅長

短ふよじ魚鱗形廣狹見合肝要ふ候
附魚鱗形左ふ記也

甲ハ播植スヘキ
所
乙ハ殘スヘキ
所





魚鱗形曲成よも凡形三角四角よも場所次第相開べし圖の通限るへかふを魚鱗形廻抱護よして内よも抱護よして場所次第見合べし

竹仕立様

第廿三項

一苗竹は三四本も五六本も一株つゝ根不碎様入念こをく鬚伐捨空枝付候所相残り餘は伐捨又切口は竹の皮又は砂仁の葉杯よて雨の不溜様堅包置き尤枝先切去り根は棒杯よて突堅め風當り候て不動様助木を立可結付置

候

附

一其根を手足よて堅め又は手足の洗汁杯掛候得は殊の外惡敷候

一壅は馬糞並稻粟のむくぼ等又は牛馬羊豕の骨杯竹の根よ不障様所々よ埋め置候は、別て能有之候

第廿四項

一竹敷の儀も樹木敷同前抱護無之候は、別て不冝候植付候敷場左右の土高上り谷の根成所且川邊小石杯有之濕の含えたる所を撰植

付候得は能有之候尤植付候時節正二月よて候

第廿五項

一竹山敷圍無之所は諸木植付抱護よ致せべく候尤風強く當り候所は敷地中よも所々諸木植付能有之候

第廿六項

一竹山敷及憔悴候儀根鬚け混合候故右通候間其山敷の恰好見合幅貳間つゝ圖の通り竹伐除根掘取敷拵致し置候は、其翌年より右敷地へ竹寄子出盛生致し候

明地横貳間

上 全

上 全

上 全

上 全

上 全

第廿七項

一右敷地へ竹可差寄候右竹篤と有付候は、最
前殘置候竹伐除け敷拵可致候左候得は其所
へ又々子差寄夫より山敷惣様宜敷罷成年増
盛生致し候

毎年竹山相改候歳相記様

第廿八項

一當春出候子八月より相改候節本毎より五六寸の
所へ小刀よて一の字相記し其翌年も右同斷
記置夫よて三四年も右之通り可相記候

第廿九項

一三年よりは色相付三年四年竹と見分け不罷
成候故年數見分けの爲め毎年改右通り可相
記候

竹伐取様

第三十項

一竹本毎より三如斯印へ相付置候間五つ相付置

候竹は五年四つは四年よて候間五年四年竹
よて切取可相用候

附三年竹迄は子出候間三つ有之候物は曾
て切取間敷候

第三十一項

一竹の儀右通三年迄は子出く申事候間風折よ
ても三年内の竹は大切致く相不痛様可伐取
候
右通此程樹木並竹仕立相試候處宜有之候間
此段首尾申上候以上

山奉行

乾隆拾二年丁卯九月 野村里之子親雲上

右遂披露候處申出之通仕立様能有之候間杣
山方役人へ委曲令相傳樹木相仕立候様可被
申渡旨御差圖よて候以上

乾隆拾二年丁卯九月 源阿親雲上

安里親雲上

就柚山惣計條々

第一項

一御當國前代は人居僅七八萬人罷居候付て國中
之用木存儘相達爲申由候其以後漸々人居
致繁榮最早貳拾萬人に相及候故家普請船作
事並諸道具等應人居相増候儀は案中之事候
就中御本殿御普請唐船作事之儀大材木にて
無之候得は絶て不罷成積候然處從前代柚山
法式無之心儘に伐取燒明年増木絶に成行最
早大材木甚有少く罷成尤柚山も悉く致憔悴
候付至極及御念遣去拾四年成卯年山奉行被

召立柚山法式並規模を以委細被仰渡くり舟
作候儀も堅禁止被仰付置候

第二項

一衣食之儀は年々人々之働を以相調候故今よ
こ先拾万人餘相重候共田畠之本法を以致作
毛並家業入精候は、衣食よ付ては不足無之
積よ候樹木之儀は作毛と相替數十年相經不
申は材木之用よ相立不申殊更大材木は七八
十年も百年も年數相經不申は御用相立不申
よ付柚山方別て肝要よ被仰渡御事候

第三項

一御當國之儀渡唐船作事不仕は不相叶且又御
本殿も大材木よて御普請不仕は不罷成儀よ
候然處柚山致憔悴大材木相絶候は、是非御
國元へ誂申越材木代料並積渡候運賃をも相
渡筈候至其時は御所帶方必至と當惑進退不
罷成自然と諸士百姓へ出米出錢大分被仰付
國土上下及困窮候儀必定候右之御計得を以
永代之御爲よ柚山大切よ被仰付御事候

第四項

一御本殿之儀貳拾年餘よ一度宛雜木を以御普
請仕來候右よ付ては御藏方並諸士百姓迄相

痛。候。儀。世。上。存。知。之。事。候。依。之。此。節。よ。こ。檜。木。手。
廣。相。仕。立。御。本。殿。其。外。雜。木。調。之。御。殿。皆。以。檜。木。
調。よ。被。仰。付。御。計。得。よ。て。別。て。檜。木。仕。立。方。大。切。
よ。被。仰。付。置。候。

第五項

一 粟國島

一 渡名喜島

一 伊江島

右は本よこ山敷無之候間御當地國頭方中頭
方杣山材木を以彼島々之用木相達申御計得
よ候

第六項

一 伊平屋島

一 久米島

一 慶良間島

右は各山敷持合候付隨分入精杣山致盛生彼
島々之用木相達候様よ被仰定御計得よ候

第七項

一 宮古島

右島之儀從跡々山敷之差分無之候得共大分
之薄原徒よ持合候付從此節山敷差分々杣山
の仕立様折角相働せ候杣山さへ仕立得候は

は其島之船作事家普請等他方無構可相濟之處此程船作事は八重山島へ罷渡材木致所望作事仕尤家材木も八重山島よて買取或は於御當地も買入或は大和船馬艦船よても高直を以買取段々物入所中之痛よ相成候儀畢竟彼島柚山無之故候依之新規よ柚山仕立方委細被仰渡置候

第八項

一八重山島

右島之儀當時人居少く山敷大分有之候付て何ぞ彼島の用木迄よては絶て不足無之積よ

候御當地の儀國頭中頭の柚山計よて御用繁く有之尤人居も大分よ罷在其上粟國渡名喜伊江島之用木迄も相達申事候得は先様國頭中頭之柚山迄よて達兼候節可致出來と是又御念遣至極被思召御事候幸八重山島之儀は柚山敷地大分よ有之候故永代御當地柚山之補用よ御計得彼島之柚山別て爲致盛生候様よ堅被仰渡置候
右柚山仕立方之儀よ付ては此間段々被仰渡置事候得共御領國中惣躰之御計は未被仰渡候依之右之件被仰渡候條此旨具被奉承知百

姓中にも致得心彌以柚山致盛生永代國用相
達候様可被申渡旨御差圖にて候以上

乾隆十三年戊辰五月

御物奉行

濱川親雲上

山内親雲上

安里親方

山奉行所

山奉行所規模仕次帳

第一項

覺

一科鞭拾

但山師山工人之儀山工之正法致傳受材木
楷。木。取。調。並。分。け。取。請。込。仕。居。候。付。て。は。彌。用
尺。之。木。伐。取。木。之。費。無。之。積。候。處。致。不。念。無。了
簡。之。仕。形。有。之。候。は。尤。筑。登。之。座。敷。以。上。位。
之。者。は。右。準。科。錢。申。付。御。摸。之。通。番。所。遣。よ。可
被。仰。付。候

第二項

一全五ツ

但山當勤方ニ付不念有之候は、尤筑登之座敷以上位之者右準科錢申付御摸之通番所遣ニ可被仰付候

第三項

一科錢五貫文

但山當山師山工人及不將候儀畢竟惣山當不下知故候間右通科錢申付右同斷

第四項

一同拾貫文

但入切材木並楷木之儀手形引當寸法相糺

銘書名印を以納方申渡候若無調部之儀有之被差歸候は、木之費は勿論百姓手隙之失墜題目御用支ニ罷成旁不冝候間存之山奉行筆者十日之寺入準右通科錢申付右同斷

第五項

一同五拾貫文

但いく木之儀頃年伐絶候ニ付一節商賣召留被置候盛生免許無之内相忍盜取候は、木之大小無構本ニ付右通科錢申付半分見付申出候者へ被下半分番所遣可被仰付候

第六項

一科錢三十貫文

但松木之儀諸船楫木並砂糖車冠臺木とく
と等相用肝要成御用木候處明松取候
とて素生之善惡無構致片割無了簡至極
候依之致片割候儀一向禁止被仰付候相背
候者松大小共本に付右通科錢申付右同斷

第七項

一同五十貫文

但不依何木入用長短大小相考致山工緞令
用木多有之候場所よても山氣不洩様見合

可伐取候處無了簡に致寄伐樹木盛生之支
召成候者一人に付右通科錢申付半分見
付申出候者へ被下半分番所遣に可被仰付
候

第八項

一同三十貫文

但真竹三年之内伐取候ては性弱殊更竹絶
之基ふて四年以上之竹相用候様被仰付置
候且又から木之皮いちよ之皮剥取候ては
致憔悴候間是又被召留置候相背候者一人
に付右通科錢申付右同斷尤竹並から木之

皮いちよ取揚番所用召成し若致賣拂置候
は、其引當を以代錢取納番所遣可被仰付
候

第九項

一科錢五貫文

但公私用之木伐取候砌空木よて小木覆置
候は、伐倒候木一本よ付尤仕手不相知候
は、搆之山當山師山工人へ右通申付右同
斷

第十項

一同三拾貫文

但法外之者山當山師山工人見付則々可申
出候處披露及延引候は、一人よ付右通申
付番所遣可被仰付候

第十一項

一同五拾貫文

但いちよ木之儀大材木罷成肝要成御用木
候故丸きち相用候儀不立候間いくきち同
斷被召留候相背候者有之右通申付半分見
付申出候者へ被下半分番所遣可被仰付候

第十二項

一御法度之諸木盜取密賣仕候者御法之通科錢

被仰付買取置候木取揚普請奉行所へ相納。若遣散置候は、其本數定代之通代錢平等所へ上納可被仰付候

但科錢之儀半分見付申出候者へ可被下候

第十三項

一科錢百貫文

但抱護に相係候所並山工禁止申渡置候山御用之外樹木伐取候者一人に付右通申付半分見付申出候者へ被下半分番所遣に可被仰付候
附野境之樹木は山之惣圍にて候間抱護

同斷

右通得御差圖此程召行置申候御調部之上規模帳仕次被仰付被下度奉存候以上

乾隆十六年辛未九月

東山奉行

喜屋武里之子親雲上

西山奉行

野村里之子親雲上

右之表遂披露候處可被召行旨御差圖にて候以上

乾隆十六年辛未十二月

宜野灣親雲上

與那原親方

西東

山奉行

山奉行所公事帳
第一項
...

第一項

山奉行所公事帳
第一項
山奉行所公事帳
...

第二項

山奉行所公事帳

一西原中城具志川美里越來北谷讀谷山七ヶ間切中頭山奉行相構奉行越來間切大工廻村筆者壹人美里間切知花村壹人北谷間切屋良村へ相詰候事

第三項

一金武恩納名護羽地本部今歸仁六ヶ間切西山奉行相構筆者壹人本部間切渡久地村壹人名護間切同村壹人金武間切同村大宜味國頭久志三ヶ間切東山奉行相構筆者壹人國頭間切邊土名村壹人久志間切平良村壹人大宜味間切同村西東奉行詰所定宿よては下知方差支

候付何方よても御用次第可致在宿事

第四項

一柚山仕立夫之儀各間切上納日用錢之内國頭方は壹ヶ月分北谷讀谷山越來美里具志川五ヶ間切は壹ヶ月分の半分中城西原兩間切へは壹ヶ月分之三ヶ一差分賃錢被成下乾隆拾四巳己年迄仕立山相仕廻右賃錢跡々之通御藏入召成候事

附前々柚山猥伐開仕立夫及數拾万人召付被置候御藏夫よては急よ仕立方不罷成候故右件各間切檢者役々之者熟談を以農事

之隙見合加勢夫太分差出心之及相働漸相
仕廻申候向後之儀明間出來候は、補方間
切請込よて可相濟候間此程被下置候日用
錢之儀御藏入被仰付度旨さはくり書付檢
者兩惣地頭次書を以申出趣有之本文之通
被仰付候

第五項

一材木之儀國土無之候て不叶候故此程段々御
物入を以仕立方被仰付候然は柚山之盛衰は
題目山工之いたゞ様相係候付山師山工人各
山敷差分召授置候間彌正法を以山工仕候様

可申渡事

但

一山工之正法と申は題目抱護之山川筋山之
入違候所並野境之場所且山之頂風吹通所
山氣不洩様相計用尺之木伐取高直之木は
小木連も相嗜又は逆曲之木多有之候所は
生立候小木迄も曲相成候間用事相考早々
可伐取候乍然一度ゞ惣様伐取山氣相洩候
ては不冝候間能々其了簡肝要候摺合木之
儀壹本伐取候歟兩本共素生惡敷候は、其
儘召置候共其見合尤ゞ候右通致山工伐取

候木之空枝用事之外小木よ不障様召置且
 又木よ差障候こうひかつの類則々伐捨
 且小木兩本繩を合たる様打合候等引分右
 件之心入を以平日致山入候は、山養生よ
 付て夫入無之山林追年致茂生積よ候
 一材木楷木取調候跡敷木かゝ取除不申は諸
 木生立不申明間よ罷成不冝候間所々取除
 諸木種子自然出産仕候様可致候
 第六項
 一右通各構山氣を附相働候は、打立夫を以山
 養生仕不及候然共依間切袖山敷廣候て構之

山當山師山工人よて山養生急よ不罷成所は
 百姓男拾四歳より六拾歳迄農事之隙見合山
 奉行。同筆者檢者地頭代以下之役々前夫地頭
 前おへか人年三日宛差出致養生其場所何山
 より何山迄致養生候段夫高等取占め翌年正
 月中首尾可申出事
 第七項
 一割薪木商賣爲仕候ては百姓共致勘違直木勝
 よ伐取山工正法之支罷成候よ付被召留丸薪
 木よて商賣可被仰付事
 第八項

一 杣檜木いちよいく松堅相立候てハ盛生之爲
 不罷成候間見分を以さはくり夫地頭掟文子
 前おへか人立合致下知山當山師山工人舛取
 船筑木細工加治細工灰焼耕作當右頭引人よ
 てふけ取させ杣之木は彌春中ふけ取法様之
 通穂拵仕山中場所見合何山へ何本差付何山
 より何本伐取候段且又檜木いくいちよ杣之
 儀寸法之きち尺以上之等は山奉行引付を以
 普請奉行所へ納方申渡餘は番所へ引渡右首
 尾方檢者山筆者取占め申出候は、山奉行次
 書よて諸木本數總帳其付届可仕事

第九項

一 右通隙見合役々之者山方並耕作方両様共時
 節無間違相働候は、諸事可宜候間件之心入
 を以出精候様可申渡事

第十項

一 杣山之儀每度致見廻候程締方可宜候間山當
 各構之山無油斷様申付其上檢者山奉行筆者
 地頭代惣山當山中致見廻山當山師山工人勤
 方聊緩疎無之山工方得心爲仕候儀專一候事

第十一項

一 百浦添雜木を以御普請仕候付貳拾年餘よは

御。普。請。相。改。御。藏。方。御。物。入。は。勿。論。諸。士。百。姓。迄。
相。痛。申。事。候。然。は。杵。檜。木。よ。て。御。普。請。被。仰。付。候。
は。、。數。百。年。相。保。右。故。障。無。之。候。故。杵。檜。木。別。て
手。廣。仕。立。被。仰。付。前。々。よ。り。有。來。候。檜。木。大。切。よ
被。仰。付。候。條。件。之。旨。趣。得。と。得。其。意。杵。檜。木。之。儀
屋。敷。内。亦。は。山。野。杯。へ。仕。立。置。候。等。よ。も。素。生。能
の。は。御。用。木。帳。よ。相。付。入。念。搭。護。可。申。渡。候。尤。右
帳。付。外。自。分。用。仕。候。節。差。出。を。以。山。奉。行。承。届。賣
買。共。仕。候。様。構。間。切。中。堅。可。申。渡。事

第十二項

一。唐。船。御。楷。木。相。成。候。木。甚。少。罷。成。就。中。中。楯。木。櫓

木。別。て。有。少。成。來。其。外。お。ゑ。き。や。か。ん。た。ん。お。い
た。ん。は。か。い。か。ん。さ。も。う。た。う。木。杯。之。役。物。も。續
兼。先。様。御。念。遣。被。思。召。上。候。然。は。右。役。物。木。相。絶
候。て。は。國。用。差。支。候。間。當。時。御。用。木。帳。相。付。候。本
數。は。勿。論。杵。山。並。村。圍。素。生。能。等。は。小。木。よ。て。も
見。合。御。用。木。帳。仕。次。可。仕。事

第十三項

一。松。山。並。雜。木。山。素。生。能。所。は。禁。置。御。用。木。取。出。候
砌。山。奉。行。筆。者。檢。者。承。届。將。又。曲。木。は。伐。取。候。程
樹。木。爲。盛。生。候。間。俣。柱。薪。木。之。類。申。出。次。第。山。當
檢。見。を。以。可。取。調。さ。せ。事

第十四項

一赤いちよ木よて御普請大御材木召成候は、
雜木とは搭別肝要成御用木よて候間從前々
被仰渡置候通かゝの木よその木同前入念搭
護可申渡事

第十五項

一さかん楠よておゑきやかんたん相調候得は
數拾年相保候間隨分盛生させ可申候大宜味
間切根謝銘村並本相國寺へは當分實付候楠
有之九十月之頃熟仕候間相國寺之等山奉行
筆者よて近間切之山當列登爲取調各間切配

分を以相仕立可申事

第十六項

一御帳よ相付置候檜木楠檜木杣杉もみ枯出來
いたゞ搆之山當申出候は、則々山奉行筆者
檢者地頭代惣山當差越本數取立總帳占めよ
内書よて拂出御印添可申候若搆之山當致不
念惣本之内枯之跡方無之不足相立候は、御
吟味之上御咎目可被仰付事

第十七項

一御用木取出候砌役物付等委細相糺御用木帳
押札を以拂出右同斷之事

附間切地帳よは山奉行印よて其記部可致候

第十八項

一御用木空木よて戸ひら木たらい水舟春相調候は、木之費無之可宜候間山奉行承届御用木よ紛無之様作調させ焼印を以商賣共可爲仕事

第十九項

一杣山他間切境並野境之土手相崩候は、則々構之山當申出檢者山奉行筆者見届之上修甫可申付事

第二十項

一大風雨有之候後日山奉行筆者山當山師山工人召列山中致見廻差障候倒木伐除且風痛有之候木見合可致養生事

第二十一項

一諸座入切材木秋冬中取調不申は木性弱御用支も罷成候間毎年九十月迄よ取仕廻入切帳表長寸法相糺致銘書山奉行筆者名印を以月限之通納方可申渡事
附山奉行筆者何歟差合候節所之檢者足可相勉候

第廿二項

一松木之儀船楫木舂とくす砂糖車之冠基本加
治炭大薪木相用肝要成御用木候間取調候砌
其見合尤候將又大薪木之儀木數太分伐取殊
御急用之節は素生志ふる方不罷成且取出候
人夫並積渡候船間等も不勝手有之候間毎
年十二月各間切百姓男女打立所之檢者山奉
行筆者さばくり以下之役々前れゑか人迄罷
出致下知翌年中上納分津口へ取出置時節見
合積渡候は、諸座御用又は百姓農時之故障
無之可宜候條向後右通可申渡事

第廿三項

一いく木之儀無疵よは難取揃候間入皮木落無
構取得次第納方可申渡事

第廿四項

一砂糖樽兼てより漸々取調置候は、志ふる方
並積渡候船間も勝手よ罷成候間其了簡を以
調方可申渡事

第廿五項

一不依何色取調候日數相考日限相立山入申付
無油斷相働候は、題目山師山工人隙相減締
方よも可宜候間入切諸雜物は不申及時々手

形入之雜物手形到來候は、早速山奉行筆者
よて山工場等相考且日限相立山入申渡自然
日限相違候は、奉行承届科鞭拾を可申付事
第廿六項
一山雜物割府又は山工場木まゝる等山奉行筆
者下知付届方は檢者請込被仰付候然に寄を
日限致相違催促申越候儀其間切檢者方へ相
達候摸被仰付候事

第廿七項

一山當山師山工人毎月朔日山奉行筆者詰所へ
罷出諸事差圖を請各職分入念可相勤候尤星

帳相調置勤星相記奉行差越候節月々之星占
め奉行印押可申事

附筆者不詰合間切は檢者よて相勤同斷

第廿八項

一柚山よ付御法相背候者有之候は、則々可申
出候隱置露顯仕候は、其沙汰可被仰付候間
此旨曖中屹と可申渡候御法相背候儀題目所
之檢者地頭代さはくり夫地頭掟下知大形故
よ候右頭役之者共國土之爲又は各子孫之爲
相計候は、柚山も田畠之作毛同前百姓得心
可仕儀候條此旨得其意山奉行方人數一心よ

相成山法式並規模帳仕次法式惣御計之旨趣
老若男女每度具可申聞事
附御法相背者有之候は、御物奉行御取次
遂披露御摸之通印紙を以科錢申付其間切
帳本相立番所遣可致候

第廿九項

一山奉行不斷間切詰居候間何篇氣を付各間切
働之善惡見分可申出事

第三十項

一山奉行山入之砌檢者地頭代惣山當並其山構
之山當山師山工人罷出山工之致様相志ふべ

尤樹木相衰補申さて不叶場所則々其手當申
渡罷登候節首尾可申出事

第三十一項

一山奉行並筆者遠方差越殊繁多之勤定式之通
忌仕候ては御用支可罷成候間親子兄弟之外
一日致忌山當山師山工人之儀は其時見合次
第出勤可申渡事

第三十二項

一頃年大木有少唐船楫船楫木差支候付那覇泊
馬艦船並諸間切諸島地船六反帆以下被召定
御船手早舟渡地舟爬龍舟寸法帳被下置候間

右作事楷木申請候節寸法帳表調方可申渡事
但

一馬艦船作事御印紙到來候は、寸法帳表調
方申渡所之檢者地頭代惣山當立合長尺相
糺させ御船手奉行へ間合申越候尤檣櫓楫
是又御印紙を以相達且檣之儀御用木内よ
可被下候
一爬龍舟おやく木之儀頃年よやく木相用
來候處最早有少殊よ費夫多百姓痛罷成候
よ付前々之通みよす木いちよ椎木よ
ぐ調よ被仰付候

第三十三項

一山奉行搆間切之船作事之時さはくり書付よ
檢者山奉行筆者次書よて差出候は、本船見
届山奉行次書御印紙を以作事申渡奉行並筆
者檢者地頭代惣山當所之掟頭差出寸法相糺
檣櫓楫迄焼印可仕事

第三十四項

一えげ小船船長四尋壹尺七寸以下中差渡三
尺五寸迄山奉行承届作事申付焼印を以商賣
共可差通候右寸法相過候えげ小船はさはく
り書付檢者山奉行筆者次書よて差出候は、

山。奉。行。次。書。御。印。紙。を。以。作。事。申。渡。燒。印。右。同。斷。之。事

第三十五項

一。山。奉。行。構。間。切。之。舟。槽。楫。之。儀。は。山。奉。行。見。切。を。以。相。達。可。申。事

附。本。部。今。歸。仁。金。武。恩。納。四。ヶ。間。切。か。く。砂。糖。車。同。斷

第三十六項

一。山。奉。行。構。間。切。之。船。を。げ。替。之。訴。相。濟。候。は。山。奉。行。筆。者。檢。者。見。届。解。さ。せ。用。相。立。候。分。は。楷。木。入。目。帳。外。書。仕。尤。燒。印。仕。置。候。棚。板。は。奉。行。目。前。

よ。て。印。削。捨。可。申。事

附。及。破。損。候。時。其。段。さ。は。くり。檢。者。書。付。を。以。山。奉。行。方。へ。首。尾。可。申。出。候。右。楷。木。取。揚。候。は。燒。印。棚。本。行。同。斷

第三十七項

一。す。い。木。よ。て。も。くり。船。作。候。儀。一。向。被。召。留。候。す。い。木。之。儀。何。等。用。不。相。立。徒。朽。癩。候。も。有。之。候。得。共。正。木。を。以。す。い。木。相。掠。且。正。木。よ。す。い。木。よ。仕。成。候。方。便。共。仕。御。用。木。之。支。罷。成。候。故。堅。御。法。度。被。仰。付。候。事

第三十八項

一大島人よきり船買取候節賣證文請取則所
之。檢。者。次。書。山。奉。行。端。書。を。以。遂。披。露。御。物。奉。行。
裏。書。よて。相。届。候。は。奉。行。見。届。焼。印。可。申。渡。事。

第三十九項

一。明。松。之。儀。松。片。割。を。以。取。調。候。て。は。御。用。木。之。支
相。成。候。よ。付。根。石。か。し。ち。や。か。ら。石。か。し。半。分。宛
取。交。納。方。可。申。渡。事。

第四十項

一。中。頭。方。へ。明。松。賦。入。候。儀。被。召。留。候。事。
附。中。頭。方。之。儀。山。狹。所。へ。炭。薪。木。加。治。炭。仮。屋。
材。木。船。楷。木。其。上。諸。知。行。用。相。兼。殊。不。圖。之。御。

急。用。共。被。仰。付。候。故。明。松。御。用。被。仰。付。候。て。は。
御。用。木。之。支。罷。成。本。文。之。通。被。仰。付。候。

第四十一項

一。中。頭。方。知。行。夫。納。方。之。儀。夫。高。之。多。少。無。構。夫。壹
人。よ。付。炭。薪。木。半。分。つ。納。方。可。申。渡。事。
附。加。治。炭。薪。木。山。當。請。込。よ。て。取。調。させ。炭。之。
儀。は。山。工。人。請。込。可。致。候。仮。屋。材。木。同。斷。

第四十二項

一。山。奉。行。構。間。切。中。百。姓。家。作。候。材。木。差。出。山。奉。行。
承。届。御。用。木。不。罷。成。素。生。之。木。よ。山。奉。行。印。形。
よ。て。山。工。可。差。免。事。

附差出七月中限詰之筆者へ可相届候將又
國頭方之儀は格別候間貫家計差出爲仕貳
間木以下よて普請可申渡候

第四十三項

一眞竹之葉ふて家葺させ候ては盛生可仕竹も
伐取竹絶之基不冝候間被召留候乍然山原方
きなと畑よて苅取相用候儀は不苦候間右躰
之節所之檢者山奉行筆者承届山方紛無之様
よ可致事

第四十四項

一漂着人並仕上世御米積船越年仕候節入用之

仮屋材木炭薪木加治炭又は川捌杯之時いの
まんくいき跡々は應頭高賦入各間切よて寄
來遠方之所別て及迷惑候故右躰之節向後山
奉行承届最寄之所よて可取調させ事

第四十五項

一羽地大冝味久志國頭四ヶ間切山自然生之檜
木大分有之候間折々致見分聊示無之様堅可
申渡候此外相仕立候杓いく檜木同斷之事
附西原中城北谷讀谷山越來美里具志川金
武恩納名護本部今歸仁拾貳ヶ間切山中杓
檜木いちよいく太分仕立置候條本行同斷

尤實相付候時分は山中自然入渡り萌立可
申候到其節差障候雜木取除盛生候様可相
計候

第四十六項

一羽地久志大宜味國頭四ヶ間切山中萌立候檜
木折々養生不仕は爲盛生不罷成候付飯山當
召立置候間無油斷相働候様下知可仕事

第四十七項

一相仕立候檜木杓杉檜木もみ楠一帳取立御印
添置申候間役代之砌右帳面表次請取仕百姓
隙見合現本可相改事

附御船楷木見立御用木同斷

第四十八項

一中頭方之儀頃年雜木伐絶砂糖樽若松調被仰
付置候處最早雜木盛生仕候付取得次第納方
申渡可成程雜木調ふ可致事

附。き。ち。丸。木。又。柱。同。斷。

第四十九項

一加治炭之儀跡々中頭方よて焼出世上用事相
達來候處最早人居多相成中頭一手よては不
自由有之候段加治方申出趣有之町方之者於
國頭方御用木之空木よて焼出候儀御免被仰

出候間右之者共罷越候は、山奉行筆者檢者承届山當檢見を以山入可申渡候尤諸品持渡商賣仕候ては職意不相立畢竟所中之故障旁不冝候間一向可召留事

附加治炭之儀手廣焼出候程世上又は杣山盛生之爲冝候間願出次第御免被仰出筈候

第五十項

一諸地頭衆遣夫並悴者へ薪木炭木竹請させ候ては諸御用相兼百姓及迷惑山方下知方よも差支候段中頭方申出趣有之被召留置候國頭方之儀遠方よて別て差支可申候間是又被召

留候無據入用有之方は御物奉行印紙を以相達可申事

第五十一項

一國頭方へ賦入被置候知行衆木竹入用之節御物奉行印紙を以被申越候は、山奉行承届右知行入之所有所多少見合割府申渡候摸被仰付候事

第五十二項

一先年中頭山及憔悴炭商賣被召留置候處最早盛生仕候付越來美里具志川讀谷山四ヶ間切へは山工人よて焼出商賣差免置候北谷へも

雜木盛生次第右同斷可被差免事

第五十三項

一眞竹之儀三年之内伐取候得は性弱殊更竹絶之基候間三年以上之竹より見合伐取可相用事

第五十四項

一澗地よは然々之用木出來無之積よて柚山内右躰之場所芭蕉敷被差免置候處樹木之性山中無明間茂生不仕は山氣相洩不冝候然は芭蕉之義永々召置候ては柚山故障罷成候間漸々屋敷内又ハ山野ふとへ植付柚山内有之候

芭蕉諸木仕立替仕候様可申渡候尤急よ引除させ候ては衣類繩具差支候付爲締方繪圖間付を以相渡置候間樹木植替次第右繪圖帳御印消可申事

第五十五項

一柚山内捨田右同斷可成程水を下げ何木よても生茂山氣相含候様可致候尤泉田よて右働不罷成所は藺之類相仕立重寶可仕事

第五十六項

一御法度之諸木左之通被仰付置候間少も無緩様可致下知事

第五十七項

一 榿木	一 杓
一 杉	一 檜
一 老み	一 楠
一 さかん	一 よん
一 かゝ木	一 いちよ丸きち
一 いく丸きち並三寸九分迄之角木	
一 梓	一 楊梅皮
一 かぶけ皮	一 三年内眞竹
一 秋木	一 山黒木
一 桑	一 柘木

一まをく 一せんたん

右之木數肝要成役木にて商賣一向被召留其上。浦々津口勤番等被召立且又在番檢者へも締方被仰渡候處間よ拔賣有之由不冝候右躰之仕形於津口在番勤番檢者相改候後相忍積入候歟又は夜中洋中へ引出置通船之砌積入候歟兎角段々之方便有之積り候間積荷之時早々改相仕廻送狀相付那覇泊へ參候船よて候は、船改奉行致宛書浦々へ商賣仕船よて候は、其所之檢者在番宛書を以差遣於彼方右送狀引當相改歸帆之時裏書よて可差歸

候。若相違之儀有之候は、則披露可申出候此
段。檢者在番勤番船改奉行へ被仰渡置候事
附在番勤番不詰居所ハ檢者山奉行筆者よ
て相改送狀相付候次第右同斷

第五十八項

一。い。く。木。之。儀。四。寸。よ。り。五。寸。角。迄。中。程。よ。り。て。商。賣
差。免。被。置。候。然。は。大。木。よ。り。削。取。右。寸。法。よ。り。合。候
術。共。仕。大。木。相。絶。申。積。候。間。根。空。一。方。へ。丸。形。殘
置。商。賣。可。仕。事

第五十九項

一。桐。木。之。實。熟。之。時。分。檢。者。山。奉。行。筆。者。相。合。員。數

不。洩。様。取。占。め。帳。當。座。引。合。九。月。中。限。錢。藏。へ。寄
せ。代。錢。差。替。可。賣。上。事

第六十項

一。杣。山。之。儀。正。法。を。以。山。工。不。仕。は。及。木。絶。國。用。差
支。候。儀。案。中。之。積。よ。り。て。材。木。楷。木。取。調。方。山。師。山
工。人。請。込。付。届。之。儀。は。百。姓。中。請。込。申。渡。置。候。依
之。各。間。切。頭。高。差。引。定。山。工。人。相。立。置。候。然。は。不
圖。御。用。被。仰。付。候。て。は。手。當。致。相。違。題。目。百。姓。農
事。之。故。障。旁。差。支。候。付。年。平。を。以。入。切。被。召。定。候
右。之。外。重。入。無。之。候。て。不。叶。御。用。は。三。ヶ。月。以。前
構。之。御。物。奉。行。印。紙。を。以。可。被。申。渡。候。間。有。所。多

少見合日用錢高を以無親疎賦入割府帳入用
之座元へ宿次よて可爲相屈事

附跡々は頭高差引割府仕來候處頭高之儀
每改相替其上不宜儀有之本文之通被召成

候

第六十一項

一唐船楷木入手形到來候は、早々致割府檢者

山奉行筆者見分を以手本之木形引當木性等
相志ふる取調させ寸法役物委相糺檢者筆者
之間名印を以寄せ方可申渡事

第六十二項

一與論島沖永良部島之者木竹買よ罷渡候節山
奉行承屈若山奉行方人數不詰居節は所之檢
者承屈法度之諸木拔賣無之様申付山奉行罷
越候節其段可申達事

第六十三項

一右島並大島德之島杯之者又は大和船及破損
楷木船具申請候差出及披露御印紙御物奉行
より到來次第調方申渡其首尾御物奉行方へ
可申出事

第六十四項

一御道具並故實飯米筆紙墨左之通付届可致事

一 墨紙筆

御用物座

一 錢

錢御藏

一 米

米御藏

但米時々於間切請取米御藏宛書ふて請取可差出候

第六十五項

一 御道具之儀取拂有之節帳面致付届御印居役次請取之砌跡役よて請取帳相調差出先帳引當御印居搭護可仕事

第六十六項

一 故實錢並筆紙墨半年分も入用相考可請取候

故實飯米渡方之儀山入之時山奉行筆者主從日よ三度つゝ宿詰之時貳度つゝ首里詰之時故實飯米無之往還之日は故實飯米壹度被下候間差出右之分委細相記奉行端書印紙を以宿々へ可爲拂出候筆紙墨之儀は現入取占め右同斷之事

第六十七項

一 世上之諸用林材を以相達柚山之儀國土要用成物候故御物入は勿論百姓段々手入仕立方被仰付候自今以後山工仕損其山及憔悴候は、右仕立所役よて仕百姓痛可相成儀案中の

積候處其了簡無之多々御法を犯科人出來候
段畢竟頭取之者其意味不案内故候然は地頭
代役之儀壹ヶ間切惣役よて右勘弁無之候て
不叶候間折々致山入右之意味惣山當同前得
心仕候様可申渡事

第六十八項

一山奉行方仮筆者代合之節おかす寄書之分相
見得不申候付此程山奉行よて差窮おかす書
を以相濟來候得共右通よては不冝候付乾隆
元辰年高安親雲上富島親雲上山奉行之時仮
筆者被召付候涯可相勤人躰見合三四人寄書

よて可差出旨被仰渡置候故右格よ準向後代
合之砌寄書之摸可申渡旨依御差圖彌山奉行
方公事帳よも相立置以後其通可被相勤旨乾
隆二十一年丙子年中渡候事

第六十九項

一惣山當並山當山師仮山當山工人煩御斷申出
候節其當人書付ふさはくり惣山當次書且兩
惣地頭構之山奉行次書を以おかす書取添差
出可申事

第七十項

一右おかす兩惣地頭書付構之山奉行次書ふて

差。出。御。物。奉。行。御。取。次。御。印。居。相。濟。候。は。、。面。付。帳。書。載。御。印。居。御。印。紙。兩。惣。地。頭。方。相。居。可。申。事。

第七十一項

一。仮。山。當。定。山。工。人。代。合。之。時。御。物。奉。行。所。印。ふ。て。相。達。右。同。斷。之。事。

第七十二項

一。山。當。山。師。定。山。工。人。之。儀。數。年。相。勤。候。程。勤。方。可。宜。候。處。御。位。被。下。候。得。は。無。間。も。御。斷。申。出。何。共。奉。公。人。之。本。意。忘。却。ふ。候。然。は。不。實。ふ。病。氣。を。構。斷。申。出。候。は。、。御。位。取。揚。役。儀。可。召。迎。候。山。奉。行。致。無。調。部。露。顯。仕。候。は。、。緞。令。退。役。仕。居。候。共。其。

御。咎。目。可。被。仰。付。事。

第七十三項

一。山。當。山。師。定。山。工。人。村。越。名。替。等。仕。候。節。所。之。掟。書。付。じ。地。頭。代。次。書。檢。者。兩。惣。地。頭。次。書。を。以。面。付。帳。取。添。差。出。帳。面。可。相。直。事。

第七十四項

一。山。當。山。師。仮。山。當。定。山。工。人。之。儀。各。村。所。之。遠。近。山。敷。之。廣。狹。人。居。等。見。合。相。立。置。候。間。代。合。之。節。曾。て。村。替。有。之。間。敷。事。

第七十五項

一。定。山。工。人。所。頭。引。を。以。各。間。切。村。所。應。人。居。相。立。

被。置。候。山。當。山。師。耕。作。當。舛。取。川。原。當。唐。竹。山。當。
勤。番。下。遣。飯。山。當。石。灰。燒。船。筑。代。合。之。節。右。跡。役。
被。仰。付。働。抽。候。者。は。山。工。人。勤。内。よ。て。も。御。位。被。
成。下。候。事。

附。耕。作。當。唐。竹。山。當。舛。取。川。原。當。勤。番。下。遣。石。
灰。燒。船。筑。相。進。候。節。お。か。す。書。山。奉。行。端。書。可。
仕。候。

第七十六項

一。本。部。間。切。水。名。島。山。當。所。中。よ。り。申。出。趣。有。之。無。
頭。引。三。人。被。召。立。置。候。彌。職。意。相。立。候。は。、。大。地。
方。山。當。同。前。御。位。被。成。下。候。事。

第七十七項

一。惣。山。當。免。夫。壹。人。よ。付。一。ヶ。月。三。人。宛。之。事。

第七十八項

一。山。當。山。師。壹。人。よ。付。免。夫。壹。ヶ。月。壹。人。宛。之。事。

第七十九項

一。飯。山。當。之。儀。所。役。よ。て。頭。引。御。位。被。成。下。候。儀。山。
當。山。師。同。斷。尤。山。當。山。師。代。合。之。節。勳。功。次。第。跡。
役。被。仰。付。候。事。

第八十項

一。每。年。十。二。月。山。當。山。師。飯。山。當。定。山。工。人。御。位。お。
か。す。之。儀。各。勤。年。數。並。勳。勞。等。見。合。左。之。通。相。調。

九月十五日限面付帳取添差出可申候乍不申
 勤年數取揚差て働之詮不相見得候者御位被
 成下候ては却て勤方相情不宣候間能々其了
 簡可有之事
 附面々手札持登候ては遠方之所差支候故
 山奉行並檢者よて引當其段證文相調おか
 す書取添可差出候
 覺
 黄八卷おかず
 當歳
 何村何役
 某

一年号何年何役よ成る
 一年号何年筑登之座敷頂戴
 一年号何年筑登之座敷おかず
 筑登之座敷おかず
 當歳
 一年号何年何役よ成る
 一年号何年赤八卷頂戴
 一勤役何年
 赤八卷おかず
 何村何役
 某

當。歲。

一。年。号。何。年。何。役。に。成。る。

何。某。

一。勤。役。何。年。

以。上。

月。日。

山。奉。行。

何。某。

右。通。山。當。山。師。定。山。工。人。各。一。類。宛。別。紙。相。調。兩。惣。地。頭。次。書。を。以。可。差。出。事。

第。八。十。一。項

一。右。御。位。言。上。相。濟。候。は。、。面。付。帳。致。押。札。帳。當。座。筆。者。相。合。言。上。寫。引。當。年。號。月。日。何。御。位。項。載。と。

帳。書。載。せ。御。物。奉。行。印。押。可。申。事。

乾。隆。三。十。壹。年。

第。八。十。二。項

一。惣。山。當。山。師。仮。惣。山。當。山。當。仮。山。當。は。百。人。に。付。七。人。九。り。七。を。八。し。つ。、。山。工。人。は。百。人。に。付。五。

人。之。例。を。以。御。位。被。成。下。候。摸。に。被。仰。定。候。間。勳。功。相。調。部。壹。人。に。三。人。以。上。寄。書。を。以。可。差。出。事。

第。八。十。三。項

一。申。口。御。物。奉。行。よ。に。被。申。渡。候。書。付。後。年。見。合。可。成。等。は。日。記。相。付。登。合。之。節。於。帳。當。座。致。糺。合。日。記。同。所。座。印。押。本。紙。差。歸。可。申。事。

第八十四項

一。每。年。勢。頭。方。よ。り。相。渡。候。通。書。翌。年。正。月。限。小。細。工。奉。行。所。へ。可。相。届。事。

第八十五項

一。山。奉。行。並。筆。者。構。間。切。中。乘。馬。荷。持。夫。之。儀。所。役。し。申。付。置。候。首。里。往。還。並。宿。移。之。砌。國。頭。方。は。九。ヶ。間。切。中。頭。方。は。五。ヶ。間。切。割。府。仕。候。間。乘。馬。荷。持。夫。則。々。覺。書。差。出。置。年。中。取。占。め。平。統。割。府。可。致。事。

附

一。筆。者。壹。人。よ。り。間。切。數。相。兼。下。知。仕。候。水。夫。宿。

付。並。家。普。請。敷。物。屋。敷。か。ふ。い。等。右。構。間。切。中。割。府。奉。行。並。仮。筆。者。之。儀。は。每。度。宿。移。仕。依。時。壹。ヶ。間。切。へ。數。日。詰。居。下。知。仕。候。右。失。墜。各。構。間。切。中。割。府。可。有。之。候。何。歟。御。用。し。付。何。方。へ。相。揃。候。節。山。奉。行。筆。者。檢。者。乘。馬。荷。持。夫。各。構。間。切。可。爲。所。役。候。

一。筆。者。之。儀。乾。隆。十。七。申。年。被。仰。付。置。候。通。七。月。十。二。月。年。し。兩。度。首。里。致。往。還。候。摸。被。仰。付。

第八十六項

一。乾。隆。貳。拾。七。壬。午。二。月。訟。之。趣。有。之。候。付。先。年。志。喜。屋。親。雲。上。よ。り。得。御。差。圖。被。置。候。通。中。城。西。原。

兩間切へは敷物水夫賃屋敷叶迄割府申渡候
様被仰付候事

第八十七項

一山奉行方並檢者在番勤番水夫之儀現夫入用
之外各間切摸之通貨錢可請取候前々水夫へ
雜物並夫米申付百姓痛罷成候段國頭方兩惣
地頭被申出趣有之右通被仰付候事

右山奉行所公事帳無之差支候に付此程被仰
渡置候趣を以組立申候間御志に為被仰付被
下度奉存候以上

乾隆拾六年辛未六月

山奉行

喜屋武里之子親雲上

野村里之子親雲上

御差圖扣

覺

本文申出通折々御座御見分我々共よも差越致見分候様且惣山奉行よは現在差引不致候て不叶所は時々得御差圖差越候様被仰付候

第一項

一近年杣山及憔悴候付御取扱向之儀よ付ては被爲入御念段々被仰渡趣有之仕立養生取締向等折角入念致下知事候得共届兼候儀共段々有之私共下知方迄よては夫々行届先様令盛生候様不罷成至極念遣奉存候間御座奉行

衆惣山奉行之間折々被成御見分惣奉行よは
現在差引不致候て不叶所は見込次第差越見
分被仰付度左様御座候は、頭役始山方役々
未々迄厚奉汲請一統勵立夫々能行届先様袖
山盛生可致と奉存候

本文山見廻之儀兼て被仰渡置趣有之候處緩
相成候由如何之事候條屹と仰渡通致山入見締
向嚴重行届候様可申付旨被仰付候

第二項

一詰山筆者之儀月よ五日宛山見廻被仰付度乾
隆拾丑年奉得御差圖其通被仰付置候處連々

緩し成來山入不仕見締向届兼法外之者多々
相出來申候間以來屹と惣山當共召列右通山
入よて致見締左候て其首尾翌月當座へ申出
候様被仰付度奉存候

本文申出通被仰付候

第三項

一松大木致片割候者御咎目向之儀唐船中船並
舳艫艦舳おゑきやかんたん檣木は三百貫文
後年御用可相立等は五拾貫文之科松料錢被
仰付候段御規模よ相見へ仕手不相知節は搆
山當へ其半方科松料錢被仰付御取締被仰付

事御座候得共愚昧之百姓共御用入之明松又
 は私用等も付木柄之見合無之不勘辨も致片
 割蒙御咎目候者多々罷在申候然は近年松大
 木有少相成先様右役物木相續之程無覺束相
 見へ此涯取締向一稜行届候様無之候て不叶
 事御座候間一往唐船中艀並舳艀艦艀おゑき
 やかんたん櫓木は千五百貫文後年御用可相
 立松木は貳百五十貫文仕手不相知節は構山
 當へ其半分宛科松料錢被仰付度尤右式片割
 仕置候松木之内何之御用も相立不申其外
 山中とい木曲木ふて御用不相立等段々有之

候間右舳之船木は本數取占委く差引之上片
 割差免候様被仰付度左様御座候は、公私之
 用無支相達取締向行届御用木杯へ致聊爾候
 者相止可申と奉存候

本。文。申。出。通。松。棚。板。一。往。六。尋。以。下。之。等。繰。替。被。仰。
 付。候。右。も。付。て。は。大。木。之。費。不。相。成。様。手。船。並。諸。浦。
 運。送。之。船。々。楷。木。も。致。取。締。候。様。被。仰。付。候。

第四項

一唐船楷船御作事御用六尋以上松棚板之儀追
 々右御船中艀可相成程來之等もて取調申事
 御座候處近年右御用見立之大木至て少く相

成此涯御用之次口御取計無御座候て不叶事
候處右御作事御用六尋以上棚板取調方よ大
木相禿候ては先様中船之御用續兼可申と念
遣存申候間以來右棚板之儀六尋以下之等よ
て繰替相調儀も候は、一往其通被仰付度奉
存候

本文申出通被仰付候

第五項
一中頭方國頭方へ向々より御手形入被仰付候
一 仮屋材木之儀少々之曲又は寸不足等も取替
させ候向よて百姓共隙取相成候儀は勿論第

一 木之費不少候近年柚山及憔悴候上連々御
用入多成來百姓共取調方及難儀勿論右材木
之儀一涯之御用相辨候迄よて曲寸不足等も
其見合を以致遣羽候は、隨分御用相立申筈
候處當分通よては百姓迷惑迄よて無之素生
宜先様大木之御用可相立木柄伐禿猶更柚山
及憔悴御用支相成可申と奉存候間以來仮屋
材木之儀曲寸不足よても現當御用相立候等
は致取納候様自然差歸候砌は當座へ申出さ
せ見分之上是非御用不相立等取替させ候様
被仰渡度且國頭方柚山之儀前文通憔悴付て

本文申出通被仰付候

は。御。用。入。之。御。材。木。取。調。方。六。ヶ。敷。就。中。金。武。恩。
納。本。部。今。歸。仁。名。護。五。ヶ。間。切。へ。は。猶。更。懃。悴。成。
立。各。取。持。之。山。中。よ。り。全。出。來。不。申。他。間。切。山。相。
懸。山。免。等。よ。て。漸。取。調。御。用。相。辨。候。振。合。よ。て。此。
涯。雜。木。之。盡。相。省。き。候。様。無。之。候。て。不。叶。乾。隆。元。
辰。年。山。盛。生。之。間。諸。方。御。用。之。き。ち。丸。木。松。よ。線。
替。被。仰。付。置。候。段。書。留。相。見。へ。尤。松。之。儀。最。早。御。
仕。立。方。廣。相。成。候。上。年。々。間。ぶ。け。等。仕。事。御。座。候。
間。右。仮。屋。材。木。之。儀。一。往。松。よ。て。も。取。得。次。第。納。
方。被。仰。付。度。奉。存。候。

第六項

一 國頭方九ヶ間切御仕立之檜木都て敷場不
枯損等出來及懃悴明間之所は是迄苗植種子
入等仕させ候得共其詮無之所段々有之當分
通召置候ては年々養生方として人夫之費は
勿論先様御用木出來不申躰見及申候間右躰
之敷は取占申上候は、相倒地候相應之諸木
植付方被仰付度尤檜木之儀諸御用木御仕立
敷腹々相應之所見合成合之諸木入交相仕立
させ候等は都て盛生之躰相見へ申候間以來
右様之所へ右通仕立方被仰付度奉存候